

道

求



第
八
號

第
拾
卷

明治四十五年三月十五日發行（每月一冊）
大正貳年十一月三十日發行（每月一冊）
（同冊日發行）

求道第拾卷第八號目次

求道

◎光明名號の因縁

講話

◎緊縛と解脱

近角常觀

「緊縛と解脱」——「二」歎異鈔の十三章——「三」我々の「斯う仕度い、あー仕度い」の心——四人を千人殺してんや——「五」惡しくていかね——「七」出来ざる所を哀れみ給ふお慈悲——八分つて頂くお慈悲ではない——九若干の業をもちける身にてありけるを——「一〇」我が身の罪業に氣づいたが信心でない——「一一」よくもく此の奴を——「一二」お慈悲に引つくりかへる——「一三」こんな事では「の思ひ」——「一四」念の味ひ——「歎異鈔」第一章——「一五」解脱の意義——「一六」歎異鈔第二章——「一七」善人も其善を廻して往生す——「一八」自力の心をひるかへして——「一九」惡人もとも往生の正因なり——「二〇」不思議の佛智——「二一」善もほしからず惡もおそれなし

告白

◎病隨問筆拔抄

故出村銈逸遺稿

雜錄

◎清水誓一君の最後

講話

毎日曜午前九時
求道學舎

〔本郷區森川町一帯地〕

毎土曜午後二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋堀込町説教所〕

求道

第十卷
第八號

光明名號の因縁

聖人行卷に曰く、良に知んぬ、德號の慈父ましますば能生の因縁けなん、光明の悲母ましますば所生の縁垂きなん、能所の因縁和合すべしと雖、信心の業識に非ずば光明土に到るとなし、眞實信の業識斯れ則ち内因と爲す、光明、名の父母斯れ則ち外縁と爲す、内外因縁和合して報土の眞身を得證すと、是實に名號の慈父と光明の悲母とによりて信樂開發するの一念、往生の業事成辨して攝取不捨の光益にあづかり、念佛相續して眞實報土の往生を遂くるとを顯はされたのである。

南無阿彌陀佛の名號は慈父である、盡十方無碍の光明は悲母である、此慈父の喚聲と悲母の御催によりて我等が信心は開發したまふのである、彌陀成佛のこのかたは、いまだ十劫をへたまへり、法身の光輪さほもなく、世の盲冥をてらすなり、南無阿彌陀佛の慈父は十劫已來常に招喚したまふのである、無碍の光明は我等が煩惱惡業を照らしたまふのである、然れども未だ我等が有碍を以て如來の光明に抵抗しつゝある間は未信の狀態である、されど既に無碍の光明である、如何

なる有碍も遂に碍なからしむる曉に達するのである、是と同時に初めて待兼ねたまふ大慈父招喚の御聲が聞えるのである、是實に宿善開發の時である、我等は徒に光明中の生活なりといふて既に助かりつゝあると思ふてはならぬ、如來は我等を助けんとて光明を以て照し、名號を以て呼びたまふのである、されど未だ一念開發に達せざる間は猶如來の御慈悲に逆らひつゝあるのである、三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり、我等は如來の御慈悲に對して逃れつゝある生活である、我等は如來の御慈悲を迎へつゝあるつもりで、實は如來の御慈悲をすかしつゝあるのである。何んとなれば、如來の御慈悲を迎へるつもりになりて居るときは既に自分が善人となりて居るのである、我は惡人なりと言ふときは、如來の仰の先廻はりをして、如來の御慈悲をすかしただてまつるのである、されど大慈大悲の親様は逃くるものを追はへとり、逆らふものを飽まで憐愍したまひて、逃くることも、逆らふことも出来ぬやうにして下さつた一念が、實に光明名號の因縁和合して信心開發の時である、無碍光如來の名號と、かの光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみてたまふ、實にかくの如き罪業深重なる私を捨てたまはずして飽まで濟ひたまふが親心にてまします、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生

死大海の船筏なり、罪障あもしとなげかされ、願力無窮にましませば、罪業深重もあからず、佛智無邊にましませば、散亂放逸もすてられず、かく罪重き業深き我等をかくまでも捨てたまはざる誓願の不思議である、名號の不思議である、佛智の不思議である、實に彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生を遂ぐるなりと信じて念佛をさんと思ひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、かくの如く信樂開發の一念、名號の慈父口に浮び、光明の悲母は其懷に攝めしめたまふのである、是れ實に光明名號の慈父母によりて信樂開發の一念に達せしめたまふたのである、善導大師が彌陀如來、本深重の誓願を發して光明名號を以て十方を攝化したまふ、但信心をして求念せしむと言はれたのは實に是である、かへすも、やるせなき大慈大悲の親心が徹到してよくよく御見捨なき眞實をいたさたてまつる信樂獲得が肝要である。

執持鈔に曰く、光明と名號と父母のごとくにて、子をそだてはごくむべしといへども、子となりていくべきたねなきには、父母となづくべきものなし、子のあるとき、それがために父といひ、母といふ號あり、それがごとくに光明を母にたとへ、名號を父にたとへて光明の母、名號の父といふことも、報土にましまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず

ふのである、かくて遂に眞實報土に往生して眞身を得さしていたゞくのである、『五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ、金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける』實に名號の慈父、光明の悲母は飽まで我等を濟はんとて待受たまひしが、初めて金剛堅固の信心のさだまるとき、自然と念佛も稱へられ、八萬四千の光明の懷の中に攝取さるゝのである、『信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたかはす』かならず自然の淨土にいたらしめたまふのである、是れ即ち行巻に光明名號の父母、これすなはち外縁とす、眞實信の業識これすなはち内因とす、内外因縁和合して報土の眞身を得證すとある所以である。

執持鈔に曰く、しかれば信心をおこして往生を求願するとき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり、されば名號につきて信心をおこす行者なくは彌陀如來攝取不捨のちかひ成すべからず、彌陀如來攝取不捨の御ちかひなくは、また行者の往生淨土のねかひ、なによりてか成せん、されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふこのいはれなりと、嗚呼選擇本願はやるせなき親心である、其親心の儘が作り出されたる手織手縫の着物即ち南無阿彌陀佛で

と、實に我等が信心は實に大悲の親心の届いて下された如來廻向の大信心である、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり、眞心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのたまへり、實に我等は今日に至るまで大悲の親様に反對して居つた惡逆の提婆である、阿闍世である、正面から佛に逆ふも惡逆である、御慈悲を受け流して善き物顔に振舞ふのも佛を殺して居るのである、又悲境に死し、逆境に苦むものは韋提である、頻婆沙羅である、人生の善し惡しをのみ考へて之を悲愍したまふ如來の御慈悲を空しくするの佛に抵抗して居るのである、佛は此の如き提婆阿闍世を御見捨なき御慈悲である、此の如き韋提希、頻婆沙羅に對して、阿彌陀佛此を去ること遠からずである、是實に盡十方無碍光の光明である、本願招喚の勅命である、此親心の徹到したる一念、よくよく此の如き逆惡の凡夫、底下の愚劣を御見捨なき親心といたゞき奉りたるのが、金剛堅固の信心である、一念歸命の信心である。

此の如く一念開發の立所に名號は稱へられ光明は攝取したまふのである、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となつてたてまつる、名號の慈父と光明の悲母は、またこの信心の子をそだてはよくみたまふのである、此着物を我等行者に廻向したまふとき其親心をいたゞき奉るのが信心である、其親心をいたゞくや否や、直に其着物を着せんとするのである、即念佛申さんと思ひたつ心であるのである、其時親心は深く満足して八萬四千の光明中に攝取したまふのである、かく親心をいたゞきたる已上は行住坐臥を簡はず、時所諸縁を論ぜず、其念佛の着物が着らるゝのである、彌陀大悲の誓願を、ふかく信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだえなく、南無阿彌陀佛をととなふべし。

大慈大悲の父母ましますと思ふばかりでは眞に親心をいたゞきたとは言へぬ、其親の眞心をいたゞきてこそ信心開發である、其親心は實に五濁の凡愚五障垢穢のものをたすけんとする本願である。實に手織手縫の着物は實に我等罪業深重の私に着せしめんとする親心である、我等が根機に相應したる本願である、いづれの行も及び難き地獄必定の我等に稱へさんがための唯念佛である、煩惱具足の凡夫は何れの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを憐みたまひて、願を起したまふ本意ひとへに惡人成佛の爲である、是が選擇願心である、是が光明名號の父母の心である、此親心をきかば、いかで信樂開發せざるべき、佛願の生起本末をききて疑心あることなし、之れを聞といふ、實に彌陀の五劫思惟の願をよくく案すればひとへに親戀一人がためなりけり、さればそくばの業

をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、深き親心をさく一念によくもくといたゞき奉るの外はない。

しかるに若しまた信樂開發せん此方よりあせるときは如何にしても得られぬ、聖人が弟子に對して夜明けて日出るか、日出て夜明くかと申されたのが實に是である、多くのものは夜明けて日出つると答へるのである、信樂開發の夜が明けたらば御慈悲が出て來る様に思ふのである、是は大なる誤である、御慈悲のやるせなき親心をさかば、いたゞかずには居られぬ、何んとなれば私の爲にわざ／＼待受けたまふ親心である、若くは不生者の御思召である、私の方から向ふていたゞく御慈悲ではない、與へねばならぬといふ親心である、若くは不生者のちかひゆゑ、信樂まことにときいたり、一念慶善するひとは、往生かならずさだまりぬ、他力といふとは此方より任かしたり、引寄せたりすることではない、他力と言ふは如來の本願力也、我等が根機を徹頭徹尾御存知ありて飽まで捨てず、救ひたまふ親心である、十方群生海此行信に歸命すれば攝取してすてたまはず、故に阿彌陀と名づけ奉る斯を他力といふ、必ず届けずばおかぬといふ親心にてましますがゆゑに、聞く一念に其勅命に従ひたてまつるのである、是が名號光明の父母によりて信心を生ずるのである。

講話

繫縛と解脱

一 繫縛と解脱

今日の題は『繫縛と解脱』であります。繫縛は「つなぎしる」といふ文字で、私共が日夜に煩惱の爲め、繫ぎ縛られて居る様を申すのである。又解脱は夫れを解き、脱がれた處であります。處てこは外では無い、我々の日々の日暮しなるものが、皆な煩惱の爲め日夜に三界六道に繫縛されて、一寸の動きも取れぬ處が、繫縛の有様である。『和讃』にも此の意味のお言葉は、度々用ゐられてある。先づ曇鸞大師讃には、
四論の講説さしあきて、
具縛の凡衆をみちびきて、
具縛といふのが、煩惱の爲めに、いられまゝに言ふ事である。親鸞聖人は之に
具縛トイフハ、煩惱具足ノ凡夫トイフコ、ロナリ。
との御左訓を施されてある。又『淨土和讃』の初めには、
清淨光明ならびなし、
一切の業繫ものそこりぬ、
業繫といふのが、業の爲めに縛られてるといふことである。之には又

父母が憐みて下さるといふばかりでは信心を生じない、信心を得たいといふばかりで親心は知れぬ、大慈大悲の親心ましませばこそ其親心が届いて下さるのである、其親心をいたゞきてこそ親機も御満足に思召し下さるのである本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願かくてこそ往生の業事成辨して下さるのである、五劫思惟の本願も兆載永劫の御修行も、我等が之を頂かずば之を水泡に歸するのである、徒事にするのである、しかるに願虚設ならず、力徒設ならず願力不思議のやるせなき御力によりて我等が往生を定めしめたまふのである、善導大師が彼佛今現在に成佛したまふ、當に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得と仰せられたは是である、行者が此親心をいたゞきてこそ眞の佛弟子也と讃めたまふのである、愚禿鈔に汝の言は行者也之を必定の菩薩と名く、龍樹菩薩の十住毘婆沙論に曰く即時入必定と、曇鸞菩薩の論に入正定之聚と曰へり、善導和尚は希有人也最勝人也妙好人也好人也上々人也眞の佛弟子也とある、實に是本願や行者、行者や本願のこゝろにして信心の行者光明名號の父母に攝護せられて涅槃常樂の境界に往生せしめたまふのである、護の言は阿彌陀如來果成の正意を顯す也、亦攝取不捨を形はすの貌也、則是れ現生護念と仰せられたは是である、實に是れ念佛成佛は眞宗の正意である。

惡業のツナトイフナリ。
罪ノ繩ニシハラル、ナリ。

との御左訓がある。又善導大師讃には、
佛法力の不思議には、
彌陀の本弘誓願を、
之には
増上縁となづけたり。

モロ／＼ノ惡業ニサハリナシ。

との御左訓があつて、即ち我々、斯く日夜惡業煩惱の網に縛ばられ、くゝられて、一寸の身動きもならぬ處が、惡業の繫縛であります。

二 『歎異鈔』の十三章

處て何故今日之を話すかと言ふに、私共日々の日暮しを初めとして、大にしては生死問題に至る迄、總て私共のなす事する事は、萬事萬端、此の煩惱に縛られ、業報にくゝられ、一寸も自分として動けぬのが、私共日常生活の有様である。夫れは我々が今現在斯くの如き状態にあるは、總て過去世の業報に縛られて此の如き有様にあると、自ら思ひ做すことを言うのには無い。寧ろ我々思ふやうに仕やうとするも此の業報に縛られ、思ふやう出來ざることを話し度いのであります。『歎異鈔』の十三章には、

よきこゝろのおこるも、宿業のよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしと、しるべしとさふらひ

き。云々。

とありて、我々が善き心の起り、又悪事の思はれせらるゝも、總て宿業の計らう故である。我々は徹頭徹尾業報に縛られて、卵の毛羊の毛の先にとまる塵ばかりも、自分の思うやうならぬと示されたが、『歎異鈔』十三章の御教化であります。

三 我々の「斯う仕度い、あゝ仕度い」の心。

そこで今之を適切に申すに、斯く皆様が茲に御來聴下さるは、夫れ／＼各人々々に種々の思召あつての事であるが、遠慮無く申すに、一番皆さんの思はれるは、信仰問題で言ふならば「何うかして信仰を得度いものだ」といふ事を思つて來らるゝのである。又既に信者の方にする時は「自分はもうお慈悲の事は充分聴き、彌陀の本願は分かつて居るけれども、何うも少し喜べぬ、何うかも少し喜び度い」と思つて來らるゝ方もある。又青年者にする時は「信仰を得ると日常の行動を眞面目に行ふ事が出来、立派な人格に到る事が出来る故、然うなり度い」と思はるゝ方も有らう。又人生上に人知れぬ苦勞があつて求めらるゝ方は「自分は斯く此世が思うやうにならぬから、信仰を得ると心がらくになる故、らくなり度い」と思つて來られる方もある。要するに各人各様に、夫れ／＼「斯う仕度い」「あゝなり度い」の思ひ一つて來らるゝ事と、これは私の方より然う思ふのであります。又平素個人で聞きに來られる方にして見ても、信仰に熱心なる方の何れも皆言はるゝは、「自分は何うも喜びが足らぬ、喜べぬ、お慈悲が眞に頂けたのなら、もつと善く出来さうなものであるに、善く出

來ぬ。は、お慈悲が全く頂けて無いのか知らん」と、言はるゝは矢張り同じく「自分が善く出来ぬ、もつと善くなり度い、よく喜び度い」が問題となつて居るのである。すると我々は「斯う仕度い、あゝ仕度い、もつと喜び度い、もつと人格を高め度い」の思ひしか、何人も皆な無いのである。又病人は病人で、皆な病氣をよくなり度いと思つて居る。處て其の思ひ通りに皆な善く出来るかと言ふに、善く出来ぬ。茲て此の「思うやうに善く出来ぬ」を軽い事に聞くと、縛られて居る味ひが得られぬのであります。我々は何事も思ひ通りに、喜ばうと思つて喜べ、斯く仕度いと思ひて其の如く出来、自分で自分の身が思ひ通りに自由になるかと言ふに、自由にする事が出来ぬ。其の出来ぬ所が、是れ縛られてゐるのである。今の『歎異鈔』の指示には「卵の毛羊の毛の先にとまる塵ばかりも、作る罪の宿業に非ずといふ事なしと知るべしと候ひき。」するといや今日學舎に行かうと考へて來た故、縛られて居ぬと言はるゝかも知れぬも、はや夫れが行かうといふ考へに、縛られ／＼居るのである。斯くして卵の毛羊の毛の先にとまる塵程も、縛られて動く事出来ぬが、私共日常の有様であります。

四 人を千人殺してんや

處が私共平常縛られてると思つて居るかと言ふに、思つてやせぬのである。誰しも「何うかしたらも少し善く出来やう、惡が止められやう、も少し自分が何んとかしたら、善くなれる」と、此の縛ばられてる事を知らずに、忘れて暮して居る

のである。茲に於てか、親鸞聖人の『歎異鈔』十三章の御教化が

出て來るのであります。唯圓坊に對して仰せられるには、「唯圓坊、我が言ふことをば必ず違ふまじきか」と。聖人の仰せてあるから、唯圓坊謹んで「必ず仰せに従ひます」とお受けしたら、意外にも聖人は、

たとへば人を千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし。

餘り思ひがけ無き仰せ故、唯圓坊、

おほせにては候へども、一人も此の身の器量にては、ころしつべしとおほえす候と、まうして候ひしかば、さ

てはいかに親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞ。すると聖人は、「汝必ず言ふことを聞くと云ひながら、親鸞の言葉通りに出来ぬは何故であるか。汝が仰せ通りにすると云うたは、必ず汝の本心からであらう。本心から必ず従ふと答へ置さながら、思ひ懸け無き千人殺せと言はれたら、一人も殺す事出来ぬであらう。一人も殺せぬといふは、如何に汝自身では思うやう出来ると思つて居ても、出来ぬては無い」と。之は私共今日は學舎に行かうと考へて居ても、何か出來ると、何程行き度いと思つても、も行けぬのである。又如何程人を助け度いと思つても、助ける業縁が無いと如何程苦勞しても、助けられぬ。若しや私共、心任せに物事が出来るものならば、往生の爲め千人殺せとある上は、信ずる人の言葉通り殺されさうな筈であるに、夫れが出来ぬ。其の出来ぬは、

一人もころすべき業縁なきによりて、害せざるなり。わが

ころのよくてころさぬにはあらず。

我々殺さぬは、自分が善いからだと思つて居るのであるけれども、自分の心が善くて殺さぬのでは無い、殺す可き業縁が無いから、殺せぬ迄の事である。其の代はり

また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。

すれば我々の善き事をすれば善いと思ひ、惡しき事をすれば惡しと心配して居る、此の善惡の目暮しなるものが、皆な業報にくゝられて、斯る目暮しを營みて居るのである。今親鸞聖人の此の御教化によりて頂く可きは、外では無い。人間は何程自分で仕度いともがいても、出来る可き業縁無ければ何としても出来ぬ。又其の代はり、自分が何程せず置かうと思つても、思はざる事をする事がある。故に我々は自分が善いから善を爲し、自分が惡いから惡を犯すので無い。善いも惡いも人間は、一切業報に縛られて、一步も其の外に出られぬ身の上である、といふ事でありませう。

五 「惡しくてはいかぬ」で解決の時あるか。

處て茲で一す申すに、「自分の如くこんな惡しくては、いかぬ」は、世間の道德の立場から言ふと、非常に善いのである。惡しくてもよいのだ」は、道德の上から考へると、甚だ宜しく無い。世間往々信仰を聞きぞなつて、信心の上から

は悪くてもよいのだなと、倫理の教えとは全く正反對である。併しながら、其の道德的な「こんな悪くても可かぬ」で解決がついて居るかと言うに、ついで居やせぬのである。「可かぬ」から何うするか、「止める」のである。爾からは夫れが止められるか。止められぬと、もう茲で衝き當つて居るのである。斯くして「止めるのぢや」、「善くするのぢや」と言ひつゝ、「何うも可かぬ」と皆んながいつ迄も苦しんで居る、之れがくぐられて居る處なのである。處がくぐられながら、皆んながくぐられて居る事に氣がつかぬ。矢張り何處迄も自力で行く根性があるもの故「ア」と喜び度い、もつと善く仕度い、何時迄も生き長らへ度い、あゝ仕度い、斯う仕度い」と、夫れていつかは善くなれるかと言うに、何時迄も善くなれず、「出来ぬ」と苦しみとなつて居るのである。茲で能く頂かねばならぬのであります。

六 出来ぬ事が出来るやうになるのでは無い。

又從來説教を聞きつけて居る人は、「何事も前生よりの宿業故、斯かる業報の身と諦め、覺悟するが佛のお慈悲である」といふ風に言はる。成る程結果から言うとなれば違はぬ、人間は初めから、自分は前生よりの約束で、業報に縛られ、自由が出来ぬものと諦め、それで安心がつくかといふに、着かぬのである。我々は思ふやうに仕度いが腹一杯で、夫れが出来ぬ爲め苦んで居るのである。其處で何うなるか。茲に片方に佛のお慈悲で解脱するといふ事がある。すると「お慈悲頂くと、其の出来ぬ事が出来るやうになるのか。死ぬると思ふ

と怖いのが、お慈悲頂くと死ぬのが怖く無くなるか。今迄困つて居た我々の罪咎が、お慈悲頂くと一念に、消えて善くなるのか」と、直ぐ然ういふ風に取らる。夫れ故お慈悲が頂けぬのであります。成る程我々今言ふ如く、業報に縛られ、一歩も善く出来ぬ者であるが、その業報の繋縛を解いて下さる佛のお慈悲は、直ぐ其の者を其の儘善くしてやる、其の儘未來を明らかにしてやるのと仰せては無い。茲で能く頂かなくてはならぬのである。

七 出来ざる處を哀れみ給ふお慈悲。

何うかといふに、佛のお慈悲は夫れとは全く逆さなものである。佛の方では「汝自分では立派に出来ぬも、佛の方より立派に出来るやうにさせてやる」との仰せては無い。寧ろ私が斯く業報に縛られて悩み苦しむ、立ちても居てもあらぬ心中を佛の方より能く御覽下されて、——我々自分で善く爲可きが當り前であるに、夫れが斯く善くならぬで實に苦しい、其の苦しき縛られて居る有様をよく御覽下されて、——其の苦しんで居る者、夫れ程惡業のひどい者、夫れ程心の惡しき者を、よくも呆れず見捨てずして「汝が斯く淺間しければ淺間し程、親の心は汝の心中を察し、彌々遣る瀬無く思ふ」と、親の方より私の心持ち、私の其の寄るべなき思ひを飽く迄知り抜いて、其の者を捨てぬとの遣る瀬無きお心を以て、向ふて下されたが佛の廣大なる本願なのである。我々此の遣る瀬無きお慈悲に腹ふくらせて貰へばこそ、實に今迄得やうと苦しんで居た者が、あゝ然うでは無つた、丁度小供が

お見捨て無きお慈悲一つで満足させて頂くが、佛のお慈悲に満足する姿であります。

八 分つて頂くお慈悲では無い。

菓子欲しいと、自分の身の毒になる物を欲しがると同やうに、今迄あれ欲しい、斯う仕度いと、三惡道に行き度がつて苦み惱んで居た者を、佛の方は飽く迄此の頼り少くなさ、此の間違つて居る心中を見抜いて、此の惡しき心の止まぬのが實に哀はれてあるとの御親切であつたかと、其の廣大の思召一つで、我々充分腹ふくらせて貰へるが實に佛のお慈悲なのであります。

猶ほ分りよく言ふと、皆んなが日常生活につけ、又生死問題につけ、皆んなの苦しんで居る、心中を私の方より察して話するに、誰とて今自分がやつて居るやうな事でよいとは思つて居られぬのである。誰とて出来るならば「自分の爲めに斯うもなし度い」、「人の爲めにも斯く仕度い」と腹一杯思つて居るゝのである。けれども然う思ふけれども、夫れが私の淺間しき心で、何うしても出来ぬ。出来ぬが、矢張り何處迄も自分は然う仕度い。然う仕度いが、夫れが何程苦しんで何うしても出来ぬ。といふ其の出来ざる點を深く察し下されて「成る程汝人に對しても、斯くく仕てやり度いとの情けがあるであらう。又自分の爲めに斯く仕て欲しいといふ要求があるであらう。無理も無い、去りながら夫れが出来ぬで、實に苦しからう、實に最もである、哀はれてある」と、私の淺間しき、苦しき心のどん底迄を見抜いて下されて、飽く迄其の者を見捨てず、呆れず、其の者の爲めに涙を流して下さるといふお慈悲の人だにましますば、我々は、自分の思ふやうにならぬを、自分で何う斯う仕やうては無い。此の三界に仕て見やう無き者を、夫れ程遣る瀬無く思召す、其の

始終申す事でありますが、能く佛のお慈悲の事を聞き「佛とは如何なる方であるか」と言はれる方があります。夫れ等の方に對して、此方は、佛のお姿は形で見るとは無い、お慈悲ばかりのお方であるとお話する。去りながら何程お慈悲ばかりのお姿と思つて居つても、夫れが矢張り肝腎の佛のお心を聞かぬといつて、唯此方であらう居るのは、駄目なのであります。處が眞にお慈悲を聞いて見ると、此方から佛が分つて、佛のお慈悲を頂くのでは無い。信仰の上から申すと、寧ろ佛が分つたり、未來が明らかになつて頂いた信心なら駄目なのである。そんな信心なら、切又詰ると皆な碎けて仕舞ふのであります。處が今斯く、何れの行も及ばぬ、一分一厘自分では動けぬ、其の汝の身を悉く知り抜いて、其の爲めに現はれた汝の親であるぞ、其の汝が可哀相で飽く迄見捨てぬのであるぞ」と、此のお見捨て無きお心を聞かせて貰うて見ると、佛のお姿や形や、乃至南無阿彌陀佛の謂はれが分つて頂くのでは無い。他無し「今自分の如く之れ程苦しむ、之れ程衝き當り、一分一厘動かれぬ此の者を、思ひ懸け無く此者を哀れみ給はる一人の親ましくして、此の私の苦しき處、淺間しき點をのこらず知り抜いて、而も飽く迄見捨て給はざるお慈悲でましますしか」と、茲で頂くのであります。

九 「若干の業をもちける身に於けるを」

殊に日常生活の上より言ふと、人間は妙なもので、誰でも自分が悪いと思つて居やせぬのである。「自分は之でも一生懸命にやつて居るのである」、「自分は何處迄もまことやつて居るのである」と、設へ形には善くいかなくなつた時でも、心には必ず此の氣持があるのである。夫れ故其處の自分の思ひを皆く人に理解されぬ時は、此の胸を断ち割つても、人に自分の思ひを知らせ度い、との愚癡が出て來るのであります。其の時は何故そのやうに不満足であるか、何故人生が不十分であるか、と言ふに、其の自分の心中を知て呉る、人が無いからである。夫れ故其處へ一人の人が來りて、「お前とて悪い積りて斯る事を仕たのでは無からう」と——譬へば監獄の囚人が、監獄で自分の犯した罪に泣いて居る。其處へ一人の人來りて、「如何にも汝のした事は善く無いが、汝とて初めから悪い事を仕やうと思つて仕たのでは無からう。汝とてさんざ止めやうと骨折つたが、遂に止める事が出来なんだであらう」と、自分で自分の心の仕て見やう無き處を、向うの方が先き知り抜いて、「如何にも夫れが辛いてあらう」と、此の心の最も苦しき處をば、向うより先き言ひ當てられた時は、もう此方では彼れ思ふ事は無い。「如何にも其の通りてゐります」と、此方の頭が下りて、其の情けある人の親切一つに満足するとなるのである。又生死問題にしても、矢張り然うなのであります。我々彌々死ぬるとなる時、佛のお慈悲を聞き、行く先きが明るくなり、向うに極樂があると分りて、其

處に安心するのでは無い。矢張り死ぬるとなれば、死ぬのは怖く、心淋しい、別れ度く無い。其の業報にほだされ、惱み苦しむ、仕て見やう無き者を、

佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は斯くの如きの我等が爲めなりけりと知られて、いよくたのもしくおぼゆるなり。

佛は「其の苦惱のあるのが可哀相である、其の悪い心の止まぬのが哀はれてある」と、一に大悲の親様は「我々が斯く業報にくゝられてのがれぬ處が哀はれてある、惡業に繫縛せられて動けぬ様が不慈」との廣大の御哀れみより、我々の苦しみ胸中を、残らず照らし下さる遣る瀬無き慈悲にまします。すれば我々の頂く處は何處であるか。「歎異鈔」の言葉には

彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身に於てありけるを、助けんとおぼし召し立ちける本願のかたじけなさよ。是れ程迄に業の深き、淺間しき私の心を知り抜いて、其者を見捨てぬと、斯く迄長々御心配なし下されたる、其の思召しの深きが有難いのである。若し私が自由になれたり、「らく」になりたり、喜べたりするならば、此方が既に自分の力て何うても爲し得るのである。すれば佛が哀はれみ下さる場所が無くなつて仕舞ふ。佛の御哀はれみは、「汝が不自由だから自由を與へやう」、「汝が無能だから能力を與へやう」、「汝が困つて居るから、金を遣はさう」、「死ぬと困るから、極樂にやつてやらう」との仰せでは無い。かゝる「極樂に往き度い」、「喜

び度い」「人格を高め度い」「らくになり度い」は、言葉こそ綺麗に使つて居るが、皆な私の貪欲の心である、欲深き心に外ならぬのであります。

一〇 我が身の罪業に氣づいたが信心にあらず

さて斯くいふと、直ぐ皆様は、又「斯くくゝられてると諦めたのが信仰である、仕て見やう無き身と分つたのがお慈悲である」といふ風にとらるゝ。然うでは無い。其のくゝられ善くなれ無い奴である故に、其者に遣る瀬無き廣大のお慈悲で向うて下さる、其の佛のお慈悲を頂かぬことには何もならぬのである。能く多くの人は、今言ふ、「人生に於て自分の心を知つて呉るゝ者は誰ひとり無い、もう此の者を助けて下さるは佛故、佛にしがみつゝほか無い」と言はるゝ。處が計らんや、此方がしがみつゝより前に、既に業に五劫永劫の昔に於て、佛はかねて我々の今日あることを知し召し、我々がもう仕て見やう無き心淋しき此の胸中を御覽下され、「信心」の仰せには

一切の群生海、無始より已來乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして眞實の心無し。我々平素綺麗さうな事を口にして居るが、我々のする事言ふことは皆な偽はりである。我々の本當のどこを言ふと、我々は無始より已來、今日今時に至る迄、本當の眞實、本當の清淨といふものは微塵も無く、「うそ」「偽はり」「穢れ」「罪惡」の塊りである。然ういふ我々として見れば、我々はもう闇みである。闇み故、其のやうな者は仕方が無いと、其の闇みの儘

で捨て、置くところのお慈悲では無い。即ち次ぎには、

是を以て如來一初苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一剎那も清淨ならざること無く、真心ならざることなし。

即ち其の如き、出來ぬ事を仕やうと思つて苦み、脱る可らざる業報を脱がれ度いと惱み悶えて居る——或は人が氣の毒だといふては人を助け度いと苦勞し、又人を頼みにしては人が當てにならぬと歎き、善きにつけ惡しきにつけ、又自分につけ人につけ、常に惱み苦しんで居る我々を、十方衆生と呼びかけ下された佛は、縦に三世を貫き、横に十方を御照覽の佛故、我々の何もかも佛は皆な御存知下されてある。御存知故其の哀はれる様が、不慈で仕やうが無い。冷淡なる事は言つて居られぬ。是を以てか十劫正覺の昔、佛は私の斯くの如く惡しき淺間しきを皆な知り抜いて、よくもく之に呆れも仕給はず、此の厭ふ可き奴を飽迄見捨てぬところのお慈悲が、たまりく今日大悲の親様と現はれ、「汝の苦しきも、汝の衝き當りて動けぬ事も、汝の得意も、汝の失意も皆な見通うして、其の爲め斯く心を悩まし待ち受けて居る親故、此の親を頼めと我の方から要求するので無い。斯く汝の惡しき思ひの隅々迄知り抜いて、其の汝を飽く迄見捨てぬ此の親の心を得て呉れよ」と、遣る瀬無く向うて下さる大悲の仰せなのであります。

一一 よくもく此の奴を、

昨夜も或方の處で話すると、——其の方は此の夏の求道

會の時著しく喜び下された方であるが、——其の方の御一子に宮仕へとしてお出でになる事に就き、もう此の三ヶ月ばかり御遇ひにならうと思つても、遇ふ事が出来ぬ。夫れにつけても、此のお慈悲一つを、娘に知らせ度いと思ふ。娘の行末の爲め、何うか之れ一つは知らせ置き度いと思ふ」と話されたにつきて、申したのであります。「あなたが夫れ程迄に知らせ度い／＼と思ひなさると同やうに、大悲の親様も同じく、此の吾が親心をあなたに知らせ度い／＼にて、長年遣る瀬無き御方便があつたのである。して「此の場で知らせう、此の席で氣がつくか」と、まんじりとせず待ち受けて下された御念力一つで、御同様に

茲に祖師聖人の化導によりて、法藏因位の本誓を聞く、歡喜胸にみて、渴仰肝に銘す。(式文)

と仰せられたと同様に、頂く事を待たのである」と申しした事でありす。

さてして見ると、最早や頂く所は外には無い。我々今日あゝ斯うと思つてゐるのであるけれども、我々の兎や角の思ひで行ける位ならば、彌陀の本願は入らぬ、自力で充分足りるのである。けれども我々は何れの行も及ばぬ、何の思ひも間に合はぬ。『歎異鈔』の指示には

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり。

私共到底何程悶えても思ふやう出来ぬ、善くならぬ。斯く我々

る。我々の一切は、親も子も、夫婦も兄弟も、乃至健康も財産も一つとして當てにならぬ。木に櫻まれば木も碎けて仕舞ひ、草にしがみづけば草もぬけて仕舞ふ。もう落ちるより仕舞ふが無いと、悶えに悶えて、櫻む物／＼、はたから皆な碎けて仕舞ふ。最後に、もう信心と、櫻んだ其の信心迄が碎けて仕舞ふ。其の仕て見やう無き様を御覽なされて、其の者の爲めに親が斯く居るとの遣る瀬無き仰せなのであります。

一二 佛のお慈悲に引つくりかへる。

全體、私など苦しみた時は、もう御信心を頂かうと思ひさへ無くなつて仕舞うて居た。御信心の方では、もう疾くに失望落膽して仕舞うて居たのである。何故かといふに、私など自分では、夫れ迄長い間御信心の爲め骨折つた、宗教の爲めにも盡して來た、と然う思つて居たのが、夫れが皆な駄目になつて仕舞つたのである。其處で「もう自分は仕舞うが無い、もう自分は駄目だ。もう茲に誰かひとり此の自分の苦しさ心中を、如何にも苦しからうと、察して呉れる人は無からうか。彌々もう死ぬるより外仕やうの無き此の身、頼る可き處は今は一物無いが、誰か斯くなり果てた此の身を、哀はれ可哀さうだと言つて呉るゝ者は無からうか」と。人間の最後は、う此の一所なのである。茲になると、もう櫻まうにも、しがみつかうにも、櫻む可き、しがみつく可き物さへ有りはせぬ。處へ佛の遣る瀬無き仰せを聞かせて貰うと、「佛かねて知し召して煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば云々」——私共が斯く彌々となれば一分一厘動かれざる煩惱具足の身なる事

々の、恰も箱に入つた具合ひて、一分一厘動かれざる仕て見やうなき者なる事を、佛兼ねてお見抜きなされてゐる。

茲て注意すべきは、「我々は斯く自分で一分一厘動けぬ、斯く動かれざる事を知らせて貰つたのが唯事て無い」何事も前生の因縁であると分かせて貰つたのがお慈悲である」といふ。其のやうなお慈悲では、甚だ心淋しきお慈悲である。然うぢや無い。其の一分一厘動けぬ私の、其の動けぬ處を佛兼ねて哀はれみて下されて、「あゝ如何にも汝は不自由で有らう。我は汝の其の煩惱に縛られて居る様を哀はれみ、其の汝を助けずば正覺は取らぬと現はれた、汝を救ひの親なるぞ」と、之を聞かせて貰つた一念に、私の能くいふ「あゝ能くも／＼此の者を」とある。大抵の人が皆な茲て頂きやうが違つて居る。大抵の人が皆な茲て「らくにならう、善くならう、先きをあかるくならう」と思ふから間違ふのであります。然うては無い。其の私の、何うしても明るくなれない、善くなれ無い、惱みの止まぬ、動かれ無い、其の心のどん底迄を、大悲の眼より御覽下されて、人なら呆れて仕舞ふ處を呆れもせず、益々其の、頼り無き心中を察して、其の汝が哀はれて堪えられぬとの仰せなのである。茲の具合は、恰も表門に人が來てると思はに、計らんや裏門から來て居たと言はうか、又今迄前にある／＼と前に求めて居たに、計らんや背後からお慈悲の山が碎けて來たと言はうか、皆んなが小さい／＼お慈悲の缺けらを探して居るに、計らんや背後からお慈悲の大波にさらはれたといふ有様である。我々は今言ふ如く、一分一厘善き事は出来ず、惡しき思ひは止まぬ、實に虚假不實の塊りであ

を佛は兼ねて知召し、「汝が其處を自分で自由に動かれる位ならば本願の手を籍りなくてもよい。汝は如何程行く先きを明るくならうと思つても、なれぬだらう。汝何程自由に動かうと思つても、自由に動けぬだらう。汝の心持ちは頼り無いだらう、空虚だらう、充實せぬだらう。」と「能く今日は空虚といふ言葉を用ゐられる方がある。其のたより、少き空虚の有様を哀はれみて、其者を飽く迄捨てさせ給はぬお心と聞く時は、「あゝ能くも／＼これ程空虚な仕て見やう無き者を、之れ程不まことなうを偽はりの私を、こ奴を哀はれみて見捨てぬお慈悲でましますか。私共これ迄長らく苦しくて堪えられなかつたは、もう自分はこんなつまつた奴者故、誰だつて呆れて相手にせぬだらう。もう自分の如き仕て見やう無き者は、道が無いと夫ればかり苦しく思ふて居たに、計らんや佛は、此の者を呆れず、此の罪惡極まる私を見捨て給はぬお慈悲でましますか」と、之を聞く時は、もう外の事は無い、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば……本願の忝けなさよ」と、茲て今迄の若干の業が、佛のお慈悲にひつくり返つて仕舞うのである。此の引つくり返る處が無くてはならぬのであります。

一三 「こんな事では」の思ひ、

今日大抵の人の仰しやるのが「自分如き淺間しき、こんな事では」と、茲て皆な衝き當つて仕舞つて居らるゝのである。先達ても或人が、未だ法を聞かれた事の無い或る實業家の方に聞かせ度いからとの事にて、行つてお話した。すると御主

人御兄弟の衆が、膝をつき合はせて熱心にお聞きになる。して言はるゝには、「佛はこんな惡しき心の者を、之を助ける、之を救ふとは、何うしても分らぬ」と言はれる。て私は其時申した。「實にあなたはよい處にお氣づきになつた。實にあなたが、こんな事では」と言はれるのは最もである。併しなから茲に驚く可き事は、佛は今あなたが然う言はれる其の如き者、——今あなたがこんな事では」と言はれるの通り動けぬ、其の仕て見やう無き其處を哀はれみて、其の自ら卑下せねばならぬ程、夫れ程惡しきを呆れず。惡しければ惡しき程彌々見捨てられぬとある廣大のお慈悲である。佛のお慈悲は、決して惡しくともよいと言はるゝのでは無い。去りながら、何程あなたが、之ではいかぬから、善くせぬならぬ」と思はれても、此の以上は御當りて仕て見やうが無いてあらう。其のくゝられ動けぬ處を佛は、あゝ哀はれてある、最もである、其の仕て見やう無き事を我は兼ねて知つて居る、其の心淋しき心中を、我は疾うから察して居る。其の爲め我は如何にしても汝が捨てられぬのであるとある長々御苦勞の形が、實に五劫思惟兆載永劫の修行の有様である」と話した事があります。

一四 一念の味ひ、——歎異鈔第一章

こは御存知の如く、『大經』で法藏菩薩の御苦勞をお説き下さる處にも

欲覺願覺覺を生ぜず、欲想願想覺想を起さず、色聲香味觸法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にし

其の惡しきを佛はよくもく、呆れも仕給はずして、其の者の爲めに御成就下された本願と聞く時は、最早や言ふ可き言葉も無い。「あゝ有難や南無阿彌陀佛々々」と——茲を『歎異鈔』の第一章には、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり信じて、……

何が不思議かと言ふに、斯程迄によくもく見捨て給はぬ本願が不思議である。其の本願に如何なる譯けのおはしますかは知らねども、此の仕て見やう無き私が、其の誓願不思議の約に引つけられ、往生をばとぐるなりと信じて

……念佛まうさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

今日迄稱へて居た南無阿彌陀佛は、此方から佛を攫まへよう、此方から佛にしがみつかう、とする南無阿彌陀佛である。然るに此の仕て見やう無き私の爲めに、夫れ程昔から待ち受けて下されあつた廣大の御まことを聞かせて貰うと、「あゝよくもく、夫れ程迄の遣る瀬無きお慈悲であつたか」と、其の誓願不思議に助けられ参らせ、往生をばとぐると思ひた一念に、今迄のものがく思ひも、しがみつと思ひも、あつたから皆な取れて、自然に念佛申さんと思ひ立つ心が起り、自然に稱名が口に浮んで下さる。其の浮んで下された念佛は、はや既に御恩報謝の念佛である。茲は『歎異鈔』又の示しには、

信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよく願力をあをぎまいらせば、自然のこと

て染患癡無し。三昧常寂にして智慧無礙なり。虚偽詭曲の心有ること無し。和顔愛語にして、意を先きにして承問す。云々。

とあつて、斯く佛の長々の御苦勞は、此の見捨てられぬお心一つより、常に此の優しき心を以て私に向うて下されたのである。此方が貪欲の心に、佛は無欲の心をもて向ひ、此乃が愚癡の奴故に、佛は其者に常に智慧を以て向うて下さるのである。斯く、此の仕て見やう無き者が見捨てられぬばかりに、佛は斯く如何にも、優しき、如何にも廣大なる、遣る瀬無きお心をもて向うて下さるお慈悲と聞く時は、私として惡しき性分の止む奴では無けれども、此のお見捨て無き御親切、お慈悲の下に頭が下り、疑はうとしても其のお慈悲の深きに、疑へず、又向はうとしても其の御親切の遣る瀬無きに及が立たぬ「あゝよくもく、此の者を」と、彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をばとぐるなりと信じて、此の御哀はれみの遣る瀬なきに氣がつく一念、向ふ様のお慈悲の深き一つで、此方が助けられて仕舞ふのであります。て彌々お慈悲頂く時の味ひは、先きにも申した如く「あゝよくもく」といふ心持ちである、度び／＼繰返す事なれども、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば……本願の添けなさよ——よく／＼彌陀の本願を頂くに、此の惡しき若干の業を持ちける奴にてありけるを、あゝよくもくである。々々彌々死ぬるとなる時、矢張り何としても死に度く無い。死に度く無いによりて、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ。

實に此方は煩惱の切り無し。何處迄も罪業の塊りの奴である。

はりにて、柔和忍辱のこゝろもいてくべし。すべてよろずのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ／＼と、彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを自然とまうすなり。これすなち他力にてまします。

ともありて、此の仕て見やうなき私を、飽く迄捨てさせ給はぬ誓願の御不思議と頂く時は、自然に南無阿彌陀佛々々々と口を衝いて念佛が現はて下さる。其の現はれた念佛は、はや既に報謝の念佛である。其の「念佛申さんと思ひ立つ心のおこる時、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」——其の念佛稱えんと思ひ立つ心の起つた時は、はや既に攝取不捨の御利益に預つて居るのである。といふ、之が即ちお助けに預つた一念の極促であります。

一五 解脱の意義

而して其の一念の味ひにつきては、蓮如上人『御一代聞書』には、或人「一念に御助けありたる事の有難さよと念佛申す可く候や、又御助けあらう事の有難さよと念佛申す可く候や」との間に對して、蓮如上人は「何れでもよい、但し一念に預いた正定聚の上より言ふ時は、既に助かつて居るのであるから、御助けありたる事の有難さよと喜ぶ意である」とお示し下されてある。之は御同やう一度び此のお慈悲頂いた一念の上からは、もう迷はれぬのである。攝取不捨の御利益といふは、遁げようとしても、其者を光明中にとらまへて遁

がし給はぬ、と知らせ下さるが故である。親鸞聖人『行巻』の告示には、

爾れば眞實の行信を獲る者は、心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名く。是れを初果に喩ふことは、初果の聖者睡眠懶墮なれども、二十九有に至らず。……

……何に況や十方群生海、斯の行信に歸命したてまつれば攝捨して捨てたまはず。故に阿彌陀佛と名く。是を他力と曰ふ。

と。即ち一度此の佛のおまことを頂けば、其の一念に攝取不捨の光明中に納められて、もう如何なる事ありても外へは行かれぬやうになるのである。故に聖人は又此の一念に「横まに四流を遮断する」とも知らせ下された。『信巻』には此の断四流の断の味ひをお説き下されて、

断と言ふは往相の一心を發起するが故に、生として當に受くべきの生無く、趣として應に到るべきの趣無し。已に六趣四生の因亡し果滅す、故に即ち頓に三有生死を断絶す、故に断と曰ふなり。四流とは則ち四瀑流なり。又生老死病也。

全體我々は、お助け／＼と言ふのであるが、何を助けかと言ふに此のお慈悲願く一念に、今迄の六趣四生の因亡し果滅し、頓に三有生死を断絶して、之れ迄の迷ひが断たれるから、お助けなのである。解脱といふは實に茲なのであります。て此の此慈悲願くと、茲て今迄の考は總て、「あゝ馬鹿ら

しかつた、あゝ申譯け無き事何思うて居たか」と、茲て一邊に引つくり反つて仕舞ふのである。何うかといふに、今日迄喜ばう／＼としても、喜べ無つたは、矢張り喜びといふ綺麗な殊勝な心持に成り度かつたのである。爾るにお聞かせに預つて見ると、其の喜べ無き殊勝になれぬ、此の一點善き處無き身の上を哀はれ可哀相とお見捨て無き心と承はり、南無阿彌陀佛々々と頂いて見ると、今迄の「喜び度い、善くなり度い」の思ひはすっかり捨て仕舞ひ、今迄の「あゝ仕度い、斯う仕度い」の思ひが、其處でがらりとくになつて仕舞ふのである。又現在頻死の境に迫つて居りながら、何うも死に切れず、死ぬる／＼と悶えて居る。其の死ぬる身を佛の方より先き知召し、其の者を見捨て給はぬ親様と承はるなり、死ぬる身は矢張り何處迄も心淋しき思ひは離れぬども、夫れが何うならうが斯うあらうが、すつかり遣る瀬無き御心配一つに打ち任かせて、何時の間にやら久しく苦しんだ生死の心配が解けるのである。然らば之を正面より言ひて、心淋しいのが淋しく無くなるのか、何か行く先きが自分て明らかに見えるのかといふに、然らば無き。其の心淋しき、仕て見やうの無い眞暗な心中が、夫れを哀れみ給はる此のお慈悲一つで、充分満足させて頂けるのであります。して「今日迄此の遣る瀬無きお恵みてましませしに、あゝ斯う」自分の方より思ひを運んだが、申譯け無き間違ひであつた。今日迄、此の不自由なる奴が、何うか思ふやうに繋縛が取れぬかと、夫ればかり久しく悩んだに、計らんや其の思ふやうにならぬ奴故、其處を哀はれみて、捨てさせ給はぬお慈悲でましませ

し」と頂き、又今日迄死ぬる／＼と死を恐れた者が、時來れば何と言つても死なねばならぬ事を知らされ、而も其の者が捨てさせ給はぬお慈悲一つに充分満足して、らく／＼と其の繋縛を解かせて貰へるのである。茲が今日題に申した日夜三惡道に繋縛されて居る者が、佛のお慈悲一つで解脱を蒙るといふのが、之なのであります。而して此の廣大のお慈悲でまします故、これ迄分らぬ／＼と言ふて居られた人も、此の思召を聞くなり、「今日迄あゝ斯うと、何か分つて頂く信心と思ひしに、この何うして分からぬ、何時迄も死に度く無い、此の罪業深重の奴を捨てぬとの遣る瀬なき仰せなりしか、さて／＼有難や」と、此の仰せ一つで皆な喜ばるゝのである。常に申す『歎異鈔』の二章の告示しも之に外ならぬのであります。

一六 『歎異鈔』第二章

『歎異鈔』二章の告示には

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらずべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり。……

二章の聖人の御自督も外の事は無い。親鸞自分の身は、最早や何れの行も及ばぬ、何れの道も絶え果てた仕て見やう無き者である。爾るに此の行き詰つた仕て見やう無き身の上を、捨てさせ給はぬ大悲の親様、南無阿彌陀佛御一佛、此の親様ひとりが此の者を、念佛一つで助けて下さるとの有難き仰せに預つて見れば、もう「信する外に別の仔細なきなり」——道無き私を助けるとの、其の遣る瀬無き仰せを頂く外無いの

である。如何なる醫者にも見放され、もう仕て見やう無き私を、其の者を助け度いばかりに、此の南無阿彌陀佛の衣服の藥を成就したと、渡されて見れば、もう親鸞に於ては、外の藥をも飲まうては無い。念佛以外に猶ほ往生の道をも存知して居るなら格別であるけれども、親鸞に於ては最早や何れの道も絶え果て、居るのである。爾るに其の親鸞の身を哀はれみて夫れを助ける爲めに御成就下された本願念佛の思召しと、よき人法然聖人よりお知らせに預つて見れば、もう「信する外に別の仔細なし」——處が茲て言はなければならぬは、「もう仕やうが無いから、斯の念佛でも」と、茲て此方から幾分たりとも力を入れて信するのでは無い。茲はよく人の取りぞこなはれる處である。此間も喜ばれる方が「信樂開發の時刻の極促とお聞かせに預ると、もう信ぜさせて貰ふ一つだ」と言はれる。成る程信する一つに違はぬも、其信するが、此方から信すると、力を入れて信するのでは無い。私の方は手も足も出ぬ仕て見やう無き者を、佛の方は其の仕て見やう無き者を、捨てさせ給はぬ大悲のお心と聞く時は、其の一念に最早や其のお見捨てなき仰せに頭が下り、信せずには置からず頂かずに置かうと思つても、信せず頂かずに居られ無くなるのである。今自分の此の仕やう無き處を、佛兼ねて知召して、此の者を久しく待ち兼ねるとの仰せを聞けば、設ひ人から信するなどと言はれやうが、之を信せず居られやうか。設ひ人から虚言と言はれやうとも、今現在自分が斯く事實に行き詰つて苦しんで居る、此の心中を知り抜き、之を遣る瀬無き言うて下さるお心と聞く一念には、此方より飛び立つばかりに、其の御

親切なる仰せを頂く外無いとなるのである。て此方から信じようとして信ずるにあらず、餘り慈悲の廣大なるに、此方が信ぜず居られ無くなるが、「信ずるより外に別の仔細なきなり」の仰せなのであります。

……念佛はまことに淨土にむするたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。……

而して其の念佛が、之を稱へると果して極樂に生れるのか、又は却つて地獄行きの種類になるのか、乃至此の念佛に何れ丈けの功德があるのか、そんな事は更に此方の知る處で無い。何故かといふにもとゞ念佛が、廣大な功德善根と思つて、之を頂き稱へるのでは無い。現在今自分の如く、斯く行き詰つて仕やうの無き、此の者を捨てさせ給はぬ南無阿彌陀佛を頂くと、如何なる譯けのましますかは知らねども、其の思召しの忝けなきに、之を頂き稱へず居られぬから稱へるのである。

……たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらん。……設ひ此の頂きたる慈悲が、虚言である、念佛は地獄行きの種ぢや、と言はれやうとも、もう此の慈悲が頂かず居られるもので無い。設ひ法然聖人に欺かれ、「念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔す可らず候。」何故なれば、「もう此の慈悲を信ずるばかり」と、此方から力みて信じた信心ならば、若し虚言と言はれ、欺かれたと言はれたら、どまつかんならん事もあらう。けれども今我が頂く信心は、此方から思ひを運

びて信じた信心ぢや無い。自分の如く、斯く迄三界に道の絶え果てた者を、斯く迄還る瀬無く言ふて下さる大悲の御心を聞けば、設ひ虚言であらうが、欺かされたて有らうが、其の一佛の御親切の有難さに、人は虚言とも、欺かれたとも言は言へ、もう自分に於きては「たとひ法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候」である。

……そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにあはしまさば、……法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらんか。云云。

其の後悔せぬ譯けは、此の慈悲以外に猶ほ道の有る者なら、念佛して地獄にも墮ちた場合には、「やりぞこなつた」とも「欺かれた」ともいふ後悔も有るであらうが、此の親鸞に於きては「地獄は一定すみかぞかし」——「一つも思ふやうにならぬ、他に道の無い、其の地獄一定の者を助くるとの大悲の仰せを頂いて見ると、もとゞ自分に於きては、他に仕て見ようの無い、地獄は一定すみかの身であつたのである。此の「地獄は一定すみかぞかし」といふ處が、先き言ふもがきの手も足も止み「唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし」との善き人の言葉を信じて、大悲に安住させて貰うた姿であります。して其の地獄は一定すみかの者が、此のお見捨て無き慈悲一

つて、此度びは、やす／＼と淨土に往生させて貰ふ。茲は此の造る瀬無き慈悲で知らされて見ると、實に我が身の惡しきは切りも無し、眞に地獄以外行き場の無い我々である。爾るに其の者を佛かねて知召し、他く迄も／＼捨てさせ給はぬとの仰せ故、實に私の淺間しければ淺間しき丈け彌々、斯る者を能く／＼と喜ばせて頂くのである。「今日迄長々こんな事では／＼と、我が身の惡しさを氣にかけて居たが、此の慈悲を聞かせて貰ふと、こんな事では／＼では無い、能く／＼斯る淺間しき極惡深重の私を捨てさせ給はぬ大悲の忝じけなさ」と、なるのであります。

一七 善人も其の善を廻して往生す

さて此頃は、此の前の『求道』にも書いて置いたのであるが、此の一念の味ひにつき、善惡の二つに係はらぬ、といふ事を深く喜ばせて貰うて居る事でありす。こは今迄も度々申したのではありませんが、熟々頂かせて頂くに、此の味ひは實に有難い。今日迄私共、動もすると、佛の慈悲は善惡に係はらず助け、といふやうに頂いて居るのである。も一つ言ふと、『救異鈔』の第三章に、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。」とある故、惡人程哀はれみて助けて下さるのが佛の慈悲であるとなる。すると「善人なほ以て往生を遂ぐ」の方は、善人が善の出来るは、こは誠に結構であるが、併し其の結構な者をも佛は助けて下さる、との事になる。すると、何んだか、惡人の方は、助けにやならぬから助けて下さる、となり、善人の方は露骨に言ふと「善人故助けいてもよい、

世話せいでよいけれども、矢張り同じく子供故世話して下さるのである。惡人の方はこは一刻も捨て置けぬから、世話して下さるのである」といふやうの事になる。況や日頃惡人をお助け／＼と頂く結果「善人の方は助けいてもよき者なれども、佛は夫れをもお助けである。朝廷より慈善を施し下さるといふ段になると、お目當ては喰べられぬ貧乏人にあるけれども、財産有る者にも遣らぬ譯けに行かぬから」といふやうの事になつて仕舞うのである。すると善人をお助けといふ事が、甚だ意味の分らぬ事になり、結局善人の善も大に間に合ふやうに思へる様になるのである。こは非常な取り違へなのであります。成程、陛下より救恤の金を下さるとなると、如何なる有難なる金持ちにも同やうに下さるのであるが、元來金持の自ら頼みと仕て居る金と、陛下より下さる金とは、金の性質が違つて居るのである。佛より下さるまことの金に比べると、我々の積み立て、居る金は賈金なのである。虚假不實の「うそいつはり」の金なのである。其のにせ金を持ちながら夫を何處迄も自ら善いと思つて居る故、何うしても佛のまことの金が頂かれぬが頂いて見ると、如何なるが眞の金、眞の善かと言ふに、今日迄我々が自ら眞の善であると攫んで居つた善は大間違ひのまがひ善にて、眞に眞實の善、眞實のまこととはいふと、佛より私の其の虚假不實のにせの有様を御覽下され、惡しければ惡き丈け彌々其の者を見捨てぬとの、此の佛のおまことが眞の善なのである。爾るに我々之を頂かず、何時迄も淺間しきを思はずして、自ら善人である、一つかど善い事が出来ると思つて居るのが、大間違ひなのであります。

て一度此のお慈悲に氣附かして貰ふと、今迄「自分は善人ぢや、金がある」と、自分の間違つた善を頼みにして居たのが大變で、其處になると、如何なる善人も其の一念に今迄の自分の善の衣を脱ぎ代へて、唯一筋に其の者を遣る瀬無く思召す、佛の慈悲より下さる眞實の恵みを頂くの外は無い。故に「善人なほもて往生をとぐ」とは、善人が自分の善の上に、更に佛のお慈悲を重ねて往生を遂ぐるの意味にあらず、信の一念に今日迄自分が何より大事と仕て置いた、其の自力作善を廻して、やる瀬無き大悲の御哀れみを頂き、其のお慈悲一つで往生を遂るのである。『歎異鈔』三章の指示は、實に斯うなのであります。

一八 自力の心をひるがへして

『歎異鈔』の三章には、
善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはいく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報上の往生をとぐるなり。……即ち今日迄自分の善を頼みに仕て居る自力作善の人は、偏に他力を頼む心欠けたる間、彌陀の本願が頂けぬ。然れども自力の心を廻へして、他力を頼みたてまつれば、眞實報上の往生を遂るなり」とあるのである。茲は『和讃』に、

罪福ふかく信じつゝ、

善本修習するひとは、

疑心の善人なるゆへに、

方便化上にとまるなり。

皆んなが佛智不思議を頂かず、佛の慈悲を疑ふて居るもの故に、自分で善きことをせんらぬと、力みて善本修習するとなるのである。皆様が信心を得て、自分が立派な者にならう、自分が偉くならうと思はるゝも、畢竟之に外ならぬであります。然るに佛の遣る瀬無き他力のお心は、其の幾ら自分で善くならうと思つても、喜くなれぬ其者を見捨てぬのが南無阿彌陀佛であるとの仰せである。之を聞かせて貰うと、「自力作善は……彌陀の本願にあらず、爾れども自力の心をひるがへして、他力を頼みたてまつれば、眞實報上の往生をとぐるなり」と——此の指示を耳にするなり、今日迄自分は「一かど善が出来ると、善を誇りて居た事の淺間しや、今迄是れ程のお慈悲に預りながら、善を仕なくてはならぬ」と、自分の虚假不實の善に力を入れて居た事の申譯け無しと、茲て如何なる善人も今迄の自力の善を廻して、本願他力を頼み奉るとなるのである。其の廻へすは、何て廻へすかと言ふに、善人が自分は善が出来れば、佛のお助けは自力の善で無いからと、廻へすのでは無い。

自力の心行いたらねば、
願力成就の報土には、
大小聖人みなながら、
如來の弘誓に乘すなり。

佛の淨土に參らせて貰うには、如何なる龍樹、天親の如き大小の聖者方と雖、自分の善根では、到ること出来ぬのである。之は譬へて言う早い話が、觀菊の御宴に宮内省から御招待を受けるとする。其の時其の御宴に待することを得るは、其

の御招き一つで、侍らせて頂く事が出来るのである。如何程身分が有り、金が有つたかて向ふさまより來よとの仰せが無くば、參る事が出来ぬのである。夫れと同じで、「願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなながら、如來の弘誓に乘すなり」——如何なる大小の聖者と雖、向ふ様より來よとの大悲弘誓の仰せ一つで往かれるのである。其の仰せましますは、如何に自分に金が有らうが、如何に龍樹天親二菩薩が修行をなさうが、其の金や修行の力では、何の役にも立たぬのである。其の證據には、何程自分が善を積み重ねてきたかと思つても、現に今善くなる事が出来て居ぬので無い。——又他の『和讃』には、

像法のときの智人も、

自力の諸教をさしおきて

時機相應の法なれば、

念佛門にぞいらたまふ。

時機相應は、時機は正に末代、五濁惡世、五逆十惡誹謗正法の世の中である。爾るに此の五逆十惡の者の爲めに、態々斯く迄の時機相應の遣る瀬無き慈悲とはと、龍樹天親二菩薩を初め、皆な茲で自力の諸教を差し置き、自分の長々の善を廻へして、念佛門には入りなされたといふのである。我々動もすると龍樹二菩薩の如きは、充分自力で行けるのであるけれども、茲に他力の道があるから、入らぬことせんよりは、と他力に入られたといふ思ひが有り易いのである。けれども之は全く間違ひで、斯く自力の萬行諸善ではゆけぬから、今迄の自力の心を廻へし、南無阿彌陀佛一つをお頂きなされたのである。茲をよく思はせて頂かねばならぬのであります。

一九 惡人最も往生の正因なり

さてそこで、昔から聖德太子の御言葉だと言はれて居る御文に

善尚ほとらず、況んや惡をや。

といふお言葉がある。何とやら今の『歎異鈔』の三章の指示に似て居ると思うたのであるけれども、併し「善尚ほとらずが何うもはつきりしなかつたのであるが、斯く頂くと「善尚ほ取らず」は、善人が如何に善を積み、其の善を取上げぬとの意味である。言ひ換へると、善人も其の善を廻へさなくてはならぬとの事である。すれば、善人さへ、斯く己が善に誇る思ひを廻へして、佛のお救ひを蒙るのである。既に善人が斯く、其の善が何の役にも立たぬのである。「況んや惡をや」は、況んや一の善も無き惡人が、「自分のやうな惡しき事では」とは、何言つて居るのであるか、といふ事になるのである。既に金持ちが所持して居る其の金さへ取らぬのである。然るに一文の金も無い其の淺間しき奴が、「こんな金の無いことでは」とは、何を言つて居るのであるか。既に善が有つてさへ取らぬのに、今惡人が「自分はこんな惡が有るから、こんなことでは」と言ふて居るは、畢竟善人が善を頼むと脇は同じ居るのである。佛の遣る瀬無きお心では、抑も吾が大悲の前に、「自分如きこんな淺間しき事では」、「こんな貧乏なことでは」とは、汝何を取り違ひて言うて居るのであるか。佛の大悲の前には、既に自力作善をやつて居る善人さへ、其の作善が駄目になりて、他力本願に歸入するのである。

況んや、我々煩惱具足の凡夫は、善と言つたら一も出来ぬ。其の出来ぬ分際で、「こんな悪しき事ではいかぬ」とは、何をたはけた事を言つて居るのであるぞ。我は實に汝が其の仕て見やう無き奴ぢやによりて、地獄に墮ちる。其の墮ちるを哀はれめばこそ——先き程も申しした御文であるが、今の三章の續きには、

……煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり。

今日は茲一つを申し度いのである。佛のお慈悲は實に斯く、「私がもう仕やうの無い處が哀はれてある」「喜べぬ處が可哀相である」「出来ぬ處が不惑である」といふ、此の「煩惱具足の我等は、何れの行にても生死を離るゝ事ある可らざるを哀はれみ給ひて、願を起し給ふ本意惡人成佛のためなれば云々」といふ、此の外に無いのである。斯く、最早や何れの道も絶え果て、地獄に墮ち込む惡人を、手を延べて引援むて下されたが、佛の大悲の本願なのであります。而して其の本願の遺る瀬無きは、

本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし。

其の哀はれみて下さる本願が強きか、此方の遁げ廻はる私の力の方が強いのか。佛の御親切の程が強いのか、此方がこんな事ではと遠慮してゐる心の方が強いのか。私の方は、何處迄も疑ひ強き奴なれども、

願力無窮にましますば、罪業深重ももからず佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず。

佛のお慈悲の方が強い爲め、如何に遁げ廻はる奴も、遂に其のお慈悲に捕へられ、其の飽く迄廣大な御親切の爲めに、遂に此方の胸底迄打ち割られて、「あゝ能くも——之れ程惡しき私を、其處迄お見捨て無き慈悲なるか」と、茲で「願を起したまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力を頼み奉る惡人最も往生の正因なり」とあります。て茲は古人も惡人正因とは、ひどいことを言はれたものだと言はれてある。惡人正機位ならばまだしもなれども、惡人が正因である。他の者の爲めに在るのでは無い、唯惡人だから救はれるのである。「他力を頼み奉る惡人、最も往生の正因なり」と仰せ給はるのである。何かと言ふに、惡人の此の仕て見やう無き奴が、能くも——此の者を捨てさせ給はぬ大慈悲でましますと、此の遺る瀬無き思召に腹一杯満足して、後生助け給へと佛に向いた時が他力を頼み奉る惡人最も往生の正因であるからであります。

二〇 不思議の佛智を信ずるを

又「和讃」には

不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり、信心の正因うることは、かたきかなかなほかたし。頂くは何處から頂いても同じ事である。今日迄「こんなことでは可かぬ」「こんな淺間しきことでは可かぬ」と言つて居た者が、「淺間しいから可かぬと言ふ事が有らうか、淺間しいから彌々汝を助けねばならぬのである。汝は世の中が駄目といふ

も、駄目だから我は汝が見捨てられぬのである」とある、遣る瀬無き仰せを承はりて、「成る程夫れ迄の御親切なる仰せなりしか」と、茲で其のやるせなき御言葉に今迄長い間の心配の夜が明けた時は、「不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり」である。「信心の正因うることは、難きがなかになほかたし」——此の眞實信心の正因を得ることは、實に難中の至難である。若し茲で間違つて「悪いけれどもお助け」といふ風に頂いて仕舞つた時は、報土の正因にはならぬ。それでは惡い奴が當り前でお助け、といふことになつてしまふのである。爾るに茲をも一步思ひ切り頂くと、「そんな惡いけれどもとか、こんなことではとか、そんな善し惡しに係はつた事ぢや無い。もと／＼汝が其の業報にく／＼られて出られぬ處が哀はれて起した本願なれば、汝が惡いから彌々間違はさぬのである、善く無いから彌々見捨てられぬのである」と。茲を頂く時はもはや今日迄の、斯うのあゝの思ひを根底からぶち切られて、「私の此の淺間しき、此の仕やう無き様を哀はれみて、斯く迄のやるせなき仰せなりしか。世の中はそらごとたはごと、まことあること無く、地獄は一定すみかぞかし。眞に仕て見やう無き私でります」と。最早や手も足も出やうが無く而も其の者がお見捨て無き大悲の願力無窮に浮かばされて、最早やもがこうと思ふても、もがく事が無い。かくして「彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をは遂る」と信ぜさせて貰つた處が、「よくも——此の惡人」と、不思議の佛智を信じた處である。而して其の信ずるを、「報土の因としたまへり」——茲を今の三章には、「煩惱具足の我等は何れの

行にても生死をはなるゝことある可らざるを哀れみ給ひて——即ち我々が何とかして手足をまがけばもがく程、彌々する／＼と墮ち込んで仕舞ふ、其の墮ち込む様を哀はれませ給ひて、「願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば」——救ひの手を下された本意は、其の惡い者が捨てられぬとの遺る瀬なき思召しの外無ければ、「他力をたのみたてまつる惡人もつとも往生の正因なり。」——よくも——斯くの如き私を、お見捨て無き大悲の有難やと、他力を頼み奉る惡人が最も往生の正因である。即ちやるせなき大悲に打明かされて、我が身は彌々地獄一定の惡人と、お見捨て無き慈悲の中に、眞に知られた時が、往生の正因である、との仰せなのであります。

二一 善もほしからず、惡もおそれなし

そこで又『歎異鈔』の一章には、彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云云。

罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための本願といふこと、老少善惡の人をえらばれぬといふ事とが、一寸聞くと、先きの場合と同じく、老少善惡の人をえらばぬといふは、善くても惡くても善惡に係はらぬといふ事になり、罪惡深重煩惱熾盛の方は、惡人を主としてのお助けといふことになり、何か

其間多少喰ひ違ひがある如く思はるゝのであります。けれども之が今言ふ如くで、佛のお慈悲の前には、我々の善が何等の力も無く、又悪が何等の障りにもならぬのである。言ひ換へれば佛のお慈悲は善きも、悪しきも唯我が遣る瀬無き慈悲一つて救ふとの慈悲にて、其のお慈悲は、即ち我々が斯く日夜善いとか悪いとか言うて居る、其の罪惡深重煩惱熾盛の者を見捨てぬとの慈悲である。すれば我々此の上に最早やあゝ斯う心配すること無い、との仰せなのであります。全體此のお慈悲頂く上より言ふ時は、我々が今日迄、善きを善しと思ひ、惡しきを惡しと心配して、本願の不思議にて助けて下さるといふ事を知らずに居るが、第一間違ひなのである。

『歎異抄』十三章のお示しには、

なにごとくも、こゝろにまかせたることなれば、往生のため千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず。また害せじともふとも、百人千人をころすこともあるべしとおぼせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらすることのおぼせのさふらひしなり。我々が心の善きをば善しと頼みにし、又惡しきをば惡しと心配し無ければならぬといふは、未だ此の者を本願の不思議にて助け給ふといふ事が頂けぬからなのである。去りながら彌々此の遣る瀬無き心を聞かせて頂くと、我々が此の虚假不實の身を以て、もつと善いことを仕度いなどとは何事であ

るか。佛のお慈悲の前には、我々の善が決して善にならぬのである。又此のお慈悲頂くと、我々が惡ぢや〜と惡を苦にするは、佛の長々の、惡人をお見捨て無き御辛勞を無にするものである。『歎異抄』結文のお示しには又、

……さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともしあしといふことをのみまうしあへり。

誠に我々が、罪惡の深き程を知らず、如來の御恩の高きことをも知らずして、我も人も善し惡しと言ふ事にのみ日夜腐心して居るは、是れ佛のお慈悲が分からぬからである。

……聖人のおぼせには、善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おぼせはさふらひしか。

然るに此の廣大のお慈悲を聞かせて貰うと、今迄長い間何とかしたら善き事が出来やうと思つて居たのであるが、我々の心に善き事とは、一つも出来無いのであつた。否今迄何うかしたら、親に孝行が出来やう、人に親切が盡されやうと、高

慢に暮して居たこの私の心中を哀はれみ給ひて、斯く迄御苦勞の親の御まことと頂くと、今日迄あれが善い之れが惡いなどと、一つ角自分で善し惡しを知り顔に言うて居たのが申譯け無き間違ひであつた。如來の御心に善しとおぼし召す程に知り通したらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ。又、如來の惡しと思召すほどに知り通したらばこそ惡しさを知りたるにてもあらめ。今迄人が惡しきと言つては人の爲め心配し、自分の惡しきといふては自分の爲め苦に仕て居たのであるが、佛のお慈悲の前に、我々があれがよい之が惡しなど何の面目あつて言へようぞ。皆なもてそら事たわ事まことあるとなきに、唯念佛のみぞまことにておはしますと、今日迄長々善を欲し惡を悲しと苦しみた事が、皆な一場の夢と化し、唯遣るは、何がまことかと言ふに、眞のまことは眞の佛のお慈悲の外に無い。其の外は皆な以てそら事たわ事、最早や此の外に善が出来るも出来ぬも無くなりて、斯くの如く日夜善いとか惡いとか苦しみて居るが、これが人間の淺間しき處である。之が業報に縛られて動かれざる様である。此の者をば徹頭徹尾御覽あつて、飽く迄助けんならぬと思召し給はるは、三世十方を盡さるゝ唯南無阿彌陀佛のおまこと一つ。其の御まことは、私如きまこと無き者を捨てさせ給はぬまこと、私如き不まことの奴を哀はれませ給ふまことにてましますと、茲を頂く時は、最早や南無阿彌陀佛々々と唯御念佛の外は無い。斯く頂くと最早や、善もほしからず、惡も恐れ無しである。何故かと言ふに是れ偏に、惡人正機の本願でましますが故に、惡人をお見捨て無き廣大のお慈悲でましますが故に、遂に今迄善人と自惚れて居た者も其の善を廻へし、惡人を悲しんで居た者も其の惡を廻へし、彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれずである。唯信心を要すと知るべし、其の故は罪惡深重煩

惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします。斯くして廣大なる佛の大善大功徳を頂いて見ると、今迄善惡別であると思つて居たが、善いも惡いも皆な總て罪惡深重煩惱熾盛の衆生であつたのである。も一つ言ふと茲で今迄とは善惡の意味が一轉して、惡といふは、此のお慈悲を頂かずして、人間の私がやる事は、善いも惡いも皆な惡である。善といふは、唯此の者を見捨て給はぬ廣大のお慈悲ばかり。何が眞の善かと言へば、此の惡しきを見捨て給はぬ天の覆へる如き廣大の南無阿彌陀佛ばかりである。茲になると最早や、本願を信ぜんに他は他の善も要にあらず、念佛にまします善きまゆへに、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが故に。何が善と言つても、此の南無阿彌陀佛以上の善あること無く、又此の南無阿彌陀佛まします上は、惡を恐るゝ必要更に無い。どれ程淺間しき者と雖、其の淺間しきを哀はれみて、願を起し給ふ本意惡人成佛の爲めなれば、其の惡しきを氣附かひするには及ばぬのである。如何なる惡と雖、佛の助け給はぬ惡のある事無い、となるのであります。而して茲が初めて私の胸に徹して下された一念が、信の一念である。其の一念に佛は「あゝ長々の吾が心配を遂に受取つて呉れたか」と、大喜びをなした下されて、其者を攝取不捨の光明中に收め取つて下さる。其の上は最早や動かうと欲しても、動かす事が無い。聖人のお示しには

攝取不捨の故に正定聚に住す。正定聚に住するが故に必ず減度に至る。云云。

最早や動かぬ正定聚の分人と定まるは、もと／＼お見捨て無きお慈悲の故に、其の一念に光明中に攝取して放し給はぬからである。故に一度正定聚の位に至らせて貰うた者は、或者は減度に往き、或者は往けぬといふ事は無い。必ず往かせて頂けるに決して居るのである。今日は甚だ長くなり、之にて畢る事と致します。(十月十二日)

告白

病間隨筆拔抄

故出村銈逸遺稿

はしか

本編は故醫師出村銈逸氏が、明治四十五年五月發病以來、日日胸に浮び興に乗じたる事ども書き記したる、名けて病間隨筆と云へるもの、中より、同氏が信仰の導師として、敬慕して措かざる近角常觀先生の閱覽に呈すべき部分を、遺言により抜抄せしものなり。

早急の間に抄記す、亂筆仰御寛恕。

大正二年十月十五日葬儀の翌日

縦 僕 山 田 壽 二 謹 記

八月二十二日 感想

(前略)人間が生死に就て達觀し、生を知らず死亦知らんやと、笑ふて死を迎ふる程に信仰確定すれば、日常の生活など苦にするにも及ぶまい。實際信仰も茲迄に達せざれば、現世の効薄かるべし。昨今予は極樂を未來に求めんよりは、現世より享樂を得べしと信じ、切りに信の修養に心掛く。此思索に耽けるのとき、即ち法海に船を浮かべ、信味油然として生ず。

得ると云ふことなし。自分が今多少當流の智識を得るに及んで、此地方の人々の宗教智識を計るに、誠に其淺薄と聞法の淺きに驚く。夫れが相當の念佛者にて然り。一般はさこそと推測して慨嘆に堪えざるなり。

近來驕慢の念佛者を眞向より打ちたい法を案出せり。打ちたい法を案出すると云ふては、自分も驕慢の一人となる恐れあれど、實際驕慢者を匡正するには、彼等自身に聞法の淺きを自覺懺悔せしむるにあり。其法は「眞俗二諦」の了解を問ふにあり。十人が十人此二諦の了解充分ならざるには驚けり。而も平素我宗は二諦相依なりと自慢氣に云ふ者も、さて改まりて其了解を質すと、大抵ギャフンと參ること妙なり。豈可笑しき事ならずや。

八月二十七日 煩惱起る、本願の信知
妻胃腸かたるを病む。臥する程にも無けれど夕熱少々あり。豫てより妻の結核有無を案するの折柄、心配になり出し際限なし。是れ病者の癡神經過敏の致す所と知り乍ら、馬鹿に苦になる不思議な程なり。何んて娶りたる乎、直に小供が生れると云ふは何たる因果乎、妻が結核で病んで折角の遺産はメチャ／＼になる、將來どうなるだらう、斯く夫れから夫れと煩惱充盛しては止め度なし。此時此際本願の信知を喜ぶの念生ず。開山上人の「如來のよしと思ふ程に知り通したならばよしにてあらめ、惡しと思ふ程に知り通したならば惡しきを知りたるにてあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、萬づの事皆なもてそら事、たわ事、まことあることなし、只念佛のみぞ誠にておはします」と

今夏の早暑には、病體には實に苦しかりし。殊に本月十三日頃の暑氣と病苦とは、未だに忘るゝ能はず。幸に數日前より雨降り殊に昨日來シト／＼降雨、從て陰氣急に來り、今朝は冷かなりし。

連夜咳、痰に苦しめらる。

八月二十四日 念佛者の驕慢

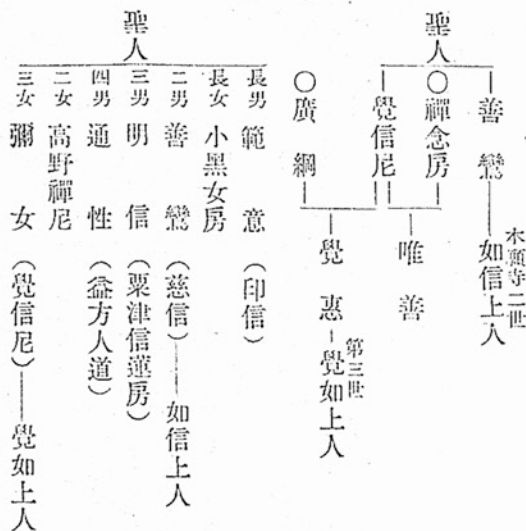
世間の念佛者はいざ知らず、此地方の念佛者——信者と云ふ者の多數は、餘程驕慢心を起したるもの多き如し。

或は思ふ、念佛者には此驕慢と云ふ癖が通有のものならざるか。又は眞個の信決定者にあらざるか。何れにせ多數の者が皆一種の驕慢に捕はれ居るもの、如し。僧侶の側を推測するに、此等驕慢者の了解などを、フン／＼と云つて聴くも随分つらき事なるべし。さりとて此驕慢者を疎略にすれば、所謂取持ちが悪敷くなるべし。教育ある者の半可通は多少匡正の法ある可きも、無教育者の半可通と來ては全く取付く島もなき度し難きものなり。

我眞宗にては「無智の凡夫、只彌陀たのむ」の簡略なる要旨を以てす。從て何等詮義立てする要もなく凡夫直入の易行門なり。されど之を誤解し居るもの多きが如し。成程彌陀たのむ此言に要旨盡くすも、此要旨を了解する迄には、各自の機に應じて皆少からず聞法の努力と時間とを費す。初めより彌陀たのむの要旨のみに安心し得るものと極め居る結果は、聞法に心を入れてと云ふことなし。從て空耳に聽門する弊を生じ、幼時より參詣するも何等當流の智識を

仰せられたる聖教の一節を思ひ出だし、漸く此煩惱をひ遣りし程なり。

亦此日讀みし眞宗史の一節に、聖人の御血統を讀み、其



の御子孫譜を見、感慨無き能はず。偉人英雄の子には人物なしとは定論とは云へ、御開山が自己の法統を繼續さすべく御子が七人の中に一人も無かりしなり。只末女覺信尼公ありて本願寺の基礎を造る。二男善鸞房の如き勘當迄されたる程の人なるに、其子に如信上人を出だす。本願寺が連綿法燈絶えざるは實に斯くの如く、其初めにありては微々たり、危険たりしなり。益なき人物である、厄介物であると思ふは凡夫の悲しさ、前途の事が分らぬなり。此世の事

必ずや有意味なり無意味ならざるなり。

斯く觀じ來りて胸中爽然佛智不思議を嘆ず。
南無阿彌陀佛。

八月三十一日

連夜の咳嗽、咯痰には一方ならず惱まざる。ヘルイン〇、
〇一頓服しても奏效なきことあり。昨夜は阿片丁幾〇、七
を其上に頓服したるに直に奏效安眠せり。咳、痰も横臥す
ると出づる故、始終坐位にあることなか／＼苦行なり。阿
片に因る眠り心地は格別良し。支那人が喫煙を止めぬのも
無理ならぬことなり。

昨今讀物一寸品切れなり。壽二君へ中央公論本年を注文
す。早く着荷を待つ。どうも枕頭何か變つた新らしき讀物
なくては心寂びし。嘆異鈔聞書、七里恒順師言行錄など讀
み度き書數々あれど金なくては仕方なし。

九月二日

昨日が二百十日の厄日なり。夜來雨降り風なく、農作物
には最も好雨なりし。此分にては本年の農作思ひやらる。
三ッ木横田祐導師久振りに來村、昨日見舞はる。種々法
話面白かりし。予は進歩的主義の僧侶を好む。
進物にす可く角立て魚を買ふ。價高きに驚く。だん／＼
生活程度向上して、從て魚類の騰貴を生ぜしむ。

九月二日 横田師、壽二君

横田師再び來訪法談を聴く。主なるものは

十八願 至心、信樂、欲生我國。

十九願 至心、回向、欲生我國。

がたを字に現はし語に表すれば此六字なり。故に誓願、
名號同體なり。

〇南無とたのむだら阿彌陀佛と救ひ賜ふ事、恰も太鼓を打
てば響くが如し。茲の了解が一寸難かし。

〇自分の無力、罪惡をつく／＼感じて、彌陀の大慈大悲を
信知するのときが一念發起のすがたなるべし。

〇すがる思ひ、彌陀ならざるば、など、種々の感情表白の
語はあれど、畢竟は自己が如來の力に打ち負けたるとき
が攝取不捨とも云ひ得べき乎。

〇どうしても眞の信仰は心の革命故、一度は人生觀にせよ
無力觀にせよ、未來觀にせよ、劇しき煩悶の結果ならざ
る可らず。

九月七日 信心の徳

意外と云はんか、信心の徳と云ふ可き乎。先達予が告白
を認め禮狀代りとして近角師先生に呈したる書が、八月號
の求道誌上に收載せられたることなり。恥かしき告白書が
多數同心の人々に見らるゝと思へば、望外の榮譽。亦之に
依りて同心の參考ともならば、法の爲め満足此上もなし。
畢竟是れ信心の徳乎。

求道誌四冊惠贈さる。早速一二冊は木村及老院へ呈せり。
何となく此日心浮き立ち喜びに堪えず、夜近所の求道者
たる老婦人達及坂田のヲヲ子招き了解を聴き、猶予が了
解を話す。話しに實が入りて二時間餘に亘り、後にて嗚呼
濟まざりし、予は何時の間にか驕慢に陥りし乎と慚愧す。
南無阿彌陀佛。

二十願 至心、發願、欲生我國。

故占部老師破門の爭點は、

占部師の信願論と他師の請求論、
及講師運動の内幕ありしなり。

毎度ながら愉快に法話す。南無阿彌陀佛。(下略)

九月六日

近角常觀師より雜誌八月號四部惠贈さる。是れ前日師に
呈したる予が告白書を收載せられたるに依る。求道誌上に
予が告白を掲載せられたること、喜びに堪えざると共に何
となく恐縮の心地す。

談話中「眞の信仰、假の信仰」なる師の論首肯す。假の信
仰と雖も決して蔑す可からず、果遂の願なるが故必ずや眞
實の信仰に入るべし。而して世の信決定者に此假の信仰多
し。即ち幾分なりとも自己の信仰に不満足あらば、そは
必ずや假の信仰たる可しと。

聞法の回数を経たる信者所謂老夫婦を戒めて曰く、信
仰は極樂云々を眼目とす可からず、一念發起、平生業成の
語を味ふ可し。信前と信後とに煩惱同一なるは未だ信を得
たるに非ずと。

言々句句肯定す。南無阿彌陀佛

九月六日 了解

〇信心を獲得すると云ふも、一に宿善二に善知識三に光明
の義合せざれば叶ひ難し。而して以上三種の因縁と、此
信心と名號とに依りて吾人は往生すべきなり。

〇南無阿彌陀佛とは法藏因位より四十八願成就してのあす

九月九日 報謝の涙を捧ぐ

亦々意外！七日午後東京近角師留守宅より飛報あり。近
角師傳道の歸途十二日豊橋より下車予を見舞ひたしと。依
て差支の有無照會せらる。

實に意外！意外！未知の師が入信の予を親しく病床に見
舞はんとせらる。何たる信仰の厚き熱烈なる教家よ。予は
感極つて忙然自失、漸く佛前に報謝の念佛を捧げ心落ち付
けたり。豊橋より茲迄は交通の不便意想外故、何とか師を
迎ふる法もがなと本多老女に相談す。老女は快諾一番、直
に法話會幹事と相談。法話會にて一席の法話を願ふ事にし
て、夫れにて一切の御出迎ひ等會の手に移す可しと、事直
に決す。老女の厚意今更ながら謝する所なり。

近角師へ直に返書出だす。縁あらば親しく御目に掛るを
得。好んば御目に掛かれずとも、予は師の厚意を十分に味
ひたり。吁南無阿彌陀佛

九月九日 全く不思議なり

如來の善巧方便、如來の大偉力、如來の大慈大悲、何と
云ひ表す可き乎。昨冬入信以來實に意外の名譽乎。名譽と
しては甚だ娑婆氣あるに似たれども、連枝よりの御召と云
ひ、求道誌上告白收載と云ひ、今亦近角師の熱烈なる厚情
と云ひ、一として是れ信心の徳ならざる乎。何と云ふ難有
事乎。

實際余自身にては余が信仰に入ると云ふこと、左程珍し
とも、偉らゐとも思はざるなり。余は只如來を信ぜざれば
居れぬ様になりて信じたるのみ。何等余が修養、修業した

る結果には勿論あらざるなり。只入信前二三ヶ月病床に劇しき煩悶に陥りたるのみ。其結果スツト彌陀を信するに至りしのみ。然るに人は余を指して善智識など云ふ。前記の如き法門の美談を生ず。全く余は自己の價値は無き者と思ふに、人は價値を付ける不思議の次第なり。

近角師へ當地の交通不便なること、法話會講話の希望とを詳細具して返書を出せしに、九日夕返電あり「ツキニノバシユルリトユク」と。此方が双方便宜ならんと安心す。余と師とは早晚面謁の期ある可きを信ず。南無阿彌陀佛。

信心を頂かんとするものは、彌陀の正因を先づ知るを要す。即ち彌陀法藏因位の時大慈悲を起し、此惱める衆生を救はんと四十八願を立て給ひ、其願成就して極樂を成し、自身も佛とならせ給ふ。大慈悲を起させ給ひし因は此煩惱熾盛の凡夫を憐みましめての上なり。故に正因即ち彌陀の慈悲を味はんとするには、先づ第一に自己の凡夫と云ふことを省みざる可らず。我機を知らざる可らず。所謂之を内觀省察と云ふ。然るを世の信者の多くは極樂と云ふ果のみに目を付け、耳を傾けて信を得んとす。到底眞實の信仰得らる可きにあらず。又彌陀の慈悲々と云ふも、慈悲一點に目を付けて信を頂かんとするも至難なり。どうしても自己の省察と云ふことなかる可からず。

九月十二日

久敷く出血を見ざりしに昨今ちよい／＼血痰を見る。今朝は殊に赤し何時もながら氣味悪し。朝の勤めに殊に聖教

を心付けて拜讀す。

此苦惱多き體、穢き心、此姿まる／＼如來に任し參らせて因果の大法を深く／＼感ずるの時んば、苦の娑婆は樂土と變じ、命終すれば報土に迎へらる。何と云ふ難有事か。南無阿彌陀佛

因果の大法を信知すると云ふも、如來にまる／＼任せ參らすと云ふも、皆是れ信決定後の心持なり。

生れて茲に三十七年始めて憂世を離れて安樂の心地に住す、幸福此上もなし。

昨今讀物數多く、樂を超過して忙はしき思ひあり。難有事なり。

九月十五日

夜は更け行く、腦は益々亢奮する、なか／＼眠れぬ。い／＼過ぎ越し方のありしことども、夫れから夫れへと追想する。其中に本願の難有さを味ひ出だす。心精進浮き浮きする。い／＼と了解を案ずる。こゝろ法界に遊ぶの樂みを姿にすることが出来るのは、自分ながら不思議に感ず。或は之が死期の急に近寄りしには非ざるかを疑ふ。時に二時、咳嗽頻出する。仕方なく起坐する。とう／＼阿片丁幾を服す。二三十分経つと呼吸も樂になり、咳嗽も止まる。夫ても眠られぬ。眞宗聖典を讀む。會心の句頻出す。とう／＼四時になり、疲れて漸くとう／＼とする。小供の騒ぎ聲に日醒むる七時なり。

近來の不眠は左程苦痛なし。只經濟上燈火を點することとを控ゆる丈なり。點火して讀書すれば腦さえて心持ち却て

好し。

九月十六日

昨夜小雨降り今日は曇る。恰度入梅時の天候の様なり。昨夜東村實平來る。法談に力が入り疲勞を覺えたりしが、夜半苦しきに目醒め、三十八度に昇熱したるを見る。どうも談話の過長が一番病氣に影響す。殊に神經を亢奮せしむるが一番悪し。法談に實が入ると云ふも、矢張り自分の驕慢心が混じる故なり。佛法に御なぐさみ候、佛法は氣のつまるものにて無之候にて、疲勞すると云ふことが己に何か佛法の眞意を外れ居る爲めなり。呼々勿體なき事なり。南無阿彌陀佛。

神戸市の實業家村野山人氏、老後家産を譲る可き相續者なし。其資産全部百萬圓を公共事業に提出して、自分夫妻は乃木神社を建て、老後を社守に送らんとす。誠に美舉果斷の處置、軍人が國家に生命を捨てると同様の殊勝なる決心と感深くす。此世での凡ての財産は如來より預り物なり、我物と云ふものなし。夫ゆゑ死ねば誰でも置て行く。此見易き理合ひが貪慾の眼ゆゑ見ざるなり。人の爲め世の爲めに盡すが人界の務め、如來への報謝ともなる。但し誰でも斯くせよと強ゆるは間違ひなり。自分の心中より斯く感じ斯く信じての上の事なり。決して見習への、せよのと少しも強ゆるは惡しき事なり。我れ如き貪、瞋、痴の止まざる凡夫、其まゝに救はんとする如來の思召し、金の惜しきものは惜しきにてよし、施すが嫌やなら施さぬにてよし、自分の心を掛けてとは云はぬ。我は是れ一切を舉げて

如來に供托す。私の信心は如來の御心なり。私の一心は佛性なり。此一心の欲する所に任す。茲に始めて天地開け悠々たり、閑々たる可し。世間の多くの金持ちが、此信心、此微妙なる眞理を感じて、己が財産を守るもの幾人乎。

財産の有無夫が生活に何程效力を有する乎。

財産あるものも、一生懸命に食ひ度き物も慾の爲めから食はず、疊て寝れるものが胡座の上で寝る。魚の食へる金があるに、僅に煮干で辛抱する、そうして唯慾の爲めにせつせと稼ぐ。

財産もなく其日の収入も危ぶまるゝ余は、食ひ度き物が食へ、讀書も自由なり、室内とても相當清潔にはする、無論疊の上に起臥する、財産の有るものよりも優れたる生活をする。

但し無財産者が心中煩悶して、あれやこれやと金まうけに腐心して居るものならば、其苦や大なる可し。良心の苛責は有財産者より一層甚しかる可し。茲に於てか生活の幸、不幸は只各自の心の持ち様一つである。茲が因果の大法を信じ、一切を舉げて如來に供托する心持ちが必要となる。茅屋に住むも心清淨ならば玉殿なる可しとは是なり。分り切つた事なれども、此心眼の開けざるものゝ多き古往今來比々皆然り。

九月十六日

日中寝て居ると氣候はよし、病苦もなく、食物も相當攝れるし、病人(患者)の來院を待つ心持ち切りなるも、さて

患者でも診察するとか、人ありて話をするとかすると、さあ呼吸が促迫となる、咳が出る、痰が出る、何となく疲勞を覺え堪えられざるに至る。氣許り達者で、體が平衡して呉れぬ。日誌でも書くとき書き初めにはペンも軽く、想も緩かに出るが、直に疲が生じて厭きが来る。ペンが重く想がコンガラかる、無茶苦茶となる、誠に仕方なきものなり。自力が通らぬなり、どうしても他力を乞はざる可からざるなり。

九月十九日

信者の了解をいろ／＼の人々に就て調ぶるに、了解に様々なり。「未來一定、極樂行きの目的に喜ぶものあり」。地獄を非常に恐怖するもあり。「自ら信心を作り、自ら安心を得たり」と喜び、佛を手前に引張りて、一個の信を無理に拵へ、ドーもまだ満足の喜びを得ぬと煩悶するものあり。此不向、自力で作製の信心者頗る多數なり。就中餘程巧妙に他力様に、一見して判定に苦む程に上手に自力信心を作り居るものは、其人自身にも氣が付かぬ程、五年も十年も熱心聞法して作り上げたものなり。此輩は今更自力と氣が付いても、なか／＼其信心を破壊する勇氣無きなり。さうして知らず／＼信を得ん／＼とあせるものなり。誠に如何ともする能はざるなり、氣の毒な次第なり。こう云ふ人には嘆異鈔第二章を聞かしてやるなり。

誠に信心と云ふことは、如來よりの頂戴物なりとしみ／＼と感ぜり。

九月二十日

／＼體の働き制限せらる。患者の診療從て不能に陥る。臥中此法悦を同心の人々に別ち、一人にても假の信仰迄にてもよし。信仰の道途に導くことを得れば是れぞ予相應の仕事なり。

九月二十一日 予が信心

○彌陀を信ぜんとして信じたるには非らず、疑はんとして疑へざるに至りたるなり。

○自己と云ふ力と、如來の御力と太刀打ちして、遂に力屈し刀折れ、自己と云ふ「我」が彌陀の御膝許へ兩手を付て降散したるとき、始めて信を頂きたる心持したるなり。

○念佛申さんとして申したるに非ざるなり。申さにやならぬ様になりて念佛申したるなり。

○煩惱を消さんとして信心出づるに非ず、煩惱起るときは自然に彌陀の事が思ひ出して来るなり。

○諸々の佛語、聖教の事ども分りて信心生じたるに非ず、信心頂きて始めて分りたるなり。

○絶對他力と云ふ事、信の一念に始めて了解したるなり。其以前は口では云へど心から眞に／＼とは思へざりしなり。

○難有いも、喜ぶ心も、地獄極樂の事も、皆信後に起り來りしなり。南無阿彌陀佛。

九月二十五日

昨今疲勞を覺ゆること甚だし。横臥を欲して、永く起きると云ふ事だん／＼減ず。夜は不眠のとき多く、晝間よりも苦し。此病感録も毎朝努力しては書き誌すなり。

難有事なり。頃日の様に患者も無くても、生活には支障を生ぜず。一ヶ月の收支も今位ならば十圓位の不足にて濟む。夫れて一家が米飯を食し、魚も一般民家よりは多く食膳に上ぼすを得、兎に角相當の生活を繼ぐることを得るは何たる幸福乎。能く世間には主人が肺患の如き慢性病に罹るときは、一年ならずして一家苦境に陥り、而も以前の生活習慣はあり、なか／＼悲劇を生ずるものあり。あれやこれやを思ひ如來の恩寵を感ずること深し。

嗚呼信仰——信仰、何事も此信仰に依て苦境は樂境に化す。假令乞食の生活に陥り、水火の責苦を受くるも此信仰あらば何等恐るゝ所なし。

ジツと寝て居れば息切れもせざれど、一寸でも動くと非常に息切れがする。夫と午後より夜間の咳嗽と苦悶とは言外に表はす能はず。随分難義なり。世の同病者を憐む。

本日朝來雨降り室内暗く鬱陶し。

九月二十一日

前夜善助、重兵衛等の母、假の信心たることを指摘し、細かに法談したるに、兩人とも痛く感動したるもの、如く、全く從來の信心は假設たることを懺悔し、衷心懺然自覺したるもの、如し。愈々眞信仰に入りたる可し。南無阿彌陀佛。

如來の思召は何とも申様なし。假の信仰より眞實の信仰に轉入せしめらる。自力煩惱の衆生には、夫れ相當に善巧方便に依りて不斷に引寄せらる。即ち不斷光佛なり。

昨夕原因なくして熱發三十九度、今朝疲勞の感あり。だん

近來同心者の求道に來るもの毎夜欠かず。されどこれもこれも皆んな同一の假信仰狀態にあり。而も同一とは云へ、一年生もあれば高等科二年生もあり、様々なり。但し極樂目當てと云ふ弊害は皆同一一般なり。終ひには嫌やになる。案ずるに之は「御文」信心より來る弊に非ざるか。「一心一向に彌陀をたのめば必ず極樂に往生す」此御言葉が假信心者には一の害をなして、極樂一定の假信心となりしにあらざる乎。「我身の淺ましき心を省みず、只々彌陀願力に乘托する」此御言が猶一步意味を有するのを、只其まゝに「淺ましき心を打ち捨て」とツと通り越して、彌陀願力に乘托する。是だから一心一向と云ふも一心一向ならず、淺ましき心と云ふも、眞實淺ましき心と覺らず、一念發起、平生業成と云ふことが更に無い。無いから何時迄も確と決定した心持が得られぬ。況んや極樂一定に於てや。死なねば安心は出來ぬことなり。

九月二十七日

二十五日夜より悪るし。咳嗽に惱まされ、殊に熱さへ併發し、呼吸困難に終日終夜を暮らす。遂に昨廿六日よりヘロイン注射を始め。注射にて緩快安臥を得、熱も出し合ひに出せば三十九度に達す。食思だん／＼衰へ、衰弱を覺ゆ。嘗て小説家南新二氏三十九度の肺結核末期中に小説を稿せしを聞く。故清澤氏も死數日前迄筆を止めざりしと。夫を思へば予はつく／＼病取けするを感ず。今朝一時無熱筆を取る。

どうも此調子では再び快方と云ふこと思へず。だん／＼

死の近づきたるを覺ゆ。

讀書サツバリ興味なし。

高熱のとき一寸ウロ／＼する。

藥力にて一時苦痛を免る。

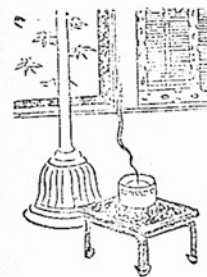
頭重く書く事無し。

右肺も三分の二は犯されたるものゝ如し。

昨夜來暴風雨鬱陶し。

九月二十七日

こう苦しくては一寸信心の了解に會心の語も出です。只攝取の大慰安を感ずるのみ。息苦しい。夜三十九度の熱のとき、ウロ／＼し、自分の信心が他人の假信心と混雜して紛失した夢を見、醒めて可笑しことに思ふ。亦頻に咳嗽癆瘵狀に發作して、苦悶云ふ計りなし。此時にも央ば夢中狀態にありて、此苦悶は之れ天魔のなす業、念佛者は無碍の一通なり、何んすれど天魔如きに苦しめられんやと念佛唱へんとすれど出でず。轉々苦しみ、目醒む。總てウロ／＼すること如斯し終り。(終り)



出村氏のことは本年春能淨院殿より直接承はり、折もあらば遇ふたならば喜ばれるであらうとの事であつた、しかるに求道本年第六號に告白が載せられたとき、郷里江州に於て之を一瞥し、存命中に一度遇ひたいとの一言に感動して、歸東の途中立寄ることに決心した、しかるに嵐車より遠隔の爲に中止したことは、日記の中にある通りである、先月伊勢に行きたるとき歸途立寄ることに約束して、十六日に往くことにして、同氏病床にありながら非常に樂みて待つて居て下されたが、遺憾ながら十二日に逝かれたのである、自分が十六日に着したときは、已に葬式の翌日であつた、此世で遇はずとも遺憾ないと言はれたが、果して其言の通りになつて、遇はんと期した君には遇はずして、却て追悼法話をして君が生前希望の通り、君が郷里の人々に直接信仰を語ることなつた、洵に不思議の至である、左に能淨院殿の御書簡を掲げて、同殿の思召を共に仰ぎ奉る次第である。

常 觀

蕭啓、時下晩秋冷寒を覺え候處、御健勝、不相變教人信の報恩業に御盡瘁被遊候段、爲法感謝至極に御座候。出村銈逸氏の往生のこと始めて承知致し、特に貴書并に同君の遺書を披見し、深く／＼感激仕候。求道八月號に掲載せられたる同君より貴兄に宛てられたる書面と云ひ、此度内見の榮を得たる遺書と云ひ、洵に同君が無二の信者として、發病以來一年半、攝取光中に報恩の殘生を送られたること、今更ながら難有きと存候。我等強業難化の者は行住坐臥に善知識の教諭を蒙るも、仲々入信難致きに、宿善深厚なる同君が聖教によりて目出度く獲信せられたること唯事とは存ぜられざることに御座候。九月二十七日にて終りを止めたる同君の病間隨筆は、言々句々眞に偽らざる告白にて、信仰の生命一字一句に輝き居るものと拜讀致し候。九月廿七日には小生名古屋別院に在り、翌二十八日同君が生國なる三河に參り、岡崎別院に滯留致し居りながら、怠慢なる小生は同君の姓名だに起想すること無之、次の日歸京の途に就き候こと、實に慚愧の至りに御座候。恐らく同君は二十七日以來最も重態となり、遂に十月十二日に至りて往生せられしこと、推察仕候。僅々四五日の相違にて終命前に貴兄に御面晤せらるゝの機會無かりしことは名殘惜しき次第に御座候得共、同君を貴兄が訪はれんと一度び思ひ立たれたることを深く感激せられし至情は、九月九日『報謝ノ涙ヲ捧グ』の條に於て充分明白なれば、至誠の感應は既に有りしことゝ存じ候。別して其條の終りに『好ンバ御目ニ掛カレゾトモ、予ハ師ノ厚意ヲ十分ニ味ヒタリ』との告白は誠に美しき真情と存じ候。同君の病間隨筆の如きは確かに信仰の生命ある文字と被存候間、是非求道の餘白を割愛して、御掲載被下候はゞ、之れを讀むもの偉大なる順縁に値遇することゝ存候。同君の遺族に贈るべき院號法名は小生の喜びて執筆致す處に御座候。就きては法名不明に御座候間、若し御承知に相成り居候はゞ、御一報を煩し度く存候。右小生の感想のみ不取敢得貴意候也 敬具。

十月二十三日

大 谷 瑩 誠

清水誓一君の最後

近角常觀

○清水誓一君は清水石松氏の養子にして實の甥である、溫厚恭謙にして眞摯忠實なる實に立派なる人格であつた、私は信仰上の交として君との關係を述べて、特に美しき君が最後に於ける信念を君に代りて告白しようと思ふ。

○抑々私が君と相識るに及んだのは今より五年程前のことである、石松氏は頗る學生を育てることを好まれて、常に大學及び高等學校に涉りて約二十名の資金を與ふるのみならず、衣服居住悉皆之を引受けて世話をせらるゝのである、氏の學生を愛することは篤志とか感服とかいふ様な程度ではない、寧ろ不思議とか奇蹟とても言はねばならぬ次第である、澤山の學生と雜然居住して怡々として樂める有様は、氏が所謂衆生縁の深きに驚かざるを得ぬ。

○氏亦信心に熱心なる、煩劇なる蟬殼町にありながら、常に聞

法と稱名は絶え間がない、氏が人の世話をせらるゝも勿論この信仰と深き關係のあることは言ふまでもない、そこで此等の同居の學生に向て毎夕勤行の時、せめて御文だけなりとも聽聞して呉れといふのが氏の頼みてあつた。

○そこで此等の學生に聞かせんがために、氏及び其一家は勿論、知人近隣の人を集めて一月に一度法話を開かれた、而して私が其請に應じて參る様になつたのが抑々御縁の始である。

○氏が、下谷初音町の岡倉邸に寓して學生と共に同居せられたるとき初めて参りたのであるが、誓一君は最も熱心なる其時の聽者であつた、講話の後に必ず深く質問せられたり、又對話するのが例であつた、夫から久しく求道學舎へ熱心に来聽せられた。

○君が求道の苦心は實に察すべきである、眞面目なる氣風の青年諸君によく見ることであるが、眞摯懇實の態度を以て是非信仰を得たいと求むるのである、あせるのである、あせればあせる程、得られぬのである、いつでも不安なる不審なる合點ゆかぬといふ態度で、しかも眞面目に恭謙に質問せられたことを想起するときは、當時君が苦心の程も今更の如く同情に堪えざらしむるものがある。

○君が大崎に住せらるゝに及びて距離が遠くなりたるため學舎へは來られなんだが、村松町に於ける石松氏宅の講話には必ず出席せられた、如何なる時でも君を見ざることはなかつた、しかし何んとなく勢なく見えたのは今から思へば病氣のせいであつたのであらうが、所謂陰が薄かつた。

○君は實に道を求め、道を求めて而して得られぬに困られた、自ら求めて得るのではない、如來廻向である、如來より與へらるゝのであると言へば、しからば一體どうするのであるかと言はるゝのである、我讀者中には此種の方が少からぬことを覺知する私は少からぬ同情に堪えられない。

○あまり求めても得られぬので、遂に疲れた氣味であつた、失望、絶望といふ嘆があつたのであらう、しかしさうとも言はず、いつもの眞面目なる態度で一點の餘裕なく聽聞せらるゝのであつた、病氣とも知らず、それとも知らぬ私は、かくして最近まで至つたのである。

○一日奥様が來られて誓一君の病篤きことを語られたときは如何にも寢耳に水であつた、石松氏宅に來りて靜養せらるゝ様になつたが、求道に疲れたる君は病の進みつゝあるにも拘らず、一向開法の希望が出ぬらしい、石松氏や奥様は聞かし

たくて致方なくなつた、そこで石松氏は誓一君に向て言はるるには、我家は代々眞宗信者として後生の一大事が何より大切である、萬が一にも、あまへを佛壇から地獄へ落す様なことあつては、親先祖に向て我が濟まぬことになるが、あまへは安心が出来て居るかと思はれた、すると誓一君は深く感じて是非一度私に來て貰ひたい、聞きたいとの事であつた、即ち其夜直ちに私は病床に吾を見舞ふたのである。

○眞面目なる君は釋せかれたる脉軀をもたげて會釋をするのである、私は之を制して枕に近ければ、君は從來求道苦心の跡を述べて、且つ近來病の進めること、身體の勝れざることを語り、夫れは夫として置きてと言を切りて、石松氏の佛壇から地獄へ落してはならぬと言はれたに深く感じて、病床をも顧みず御出を願ふたと言はれた。

○そこで私が申すには夫は夫として置きてではない、病が重ければ必ずあなたも色々心配でありましょう、人間といふものは、かく病氣になるときは親の力でも妻子の力でも致方なく、其心淋しい胸の中を誰一人察して呉れるものはなく、此方より此胸の中を開くことは出來ぬ、また人間は死といふことを考へると先きは眞の國で、實に時間も空間も考へること

が出来ぬ　かく淋しき胸の中、行く先の眞の間を深く察して
飽まで憐みて、必ず／＼助けねばならぬといふ大慈大悲の御
親心である。

○今日まで喜びたい、信仰を得たい、安心したい、助かりたいといふ様にのみあせつて居られたのであろう、どうしても喜ばれぬ、信仰が得られぬ、安心が出来ぬ、助からぬ、であらう、其助からぬものが可愛相じや、喜ばれぬものが憐れじや、夫を見捨てぬのじや、深く察するぞ、飽まで助けおほせねばならぬといふ、やるせなき弘誓の御力であると申した。

○すると忽ち、あゝ難有く、方角を間違へて居りました、喜ばれぬのを可愛相じやといふて下さるのを、喜ばうくとあせつてばかりをりました、ア、喜ばれぬを憐れんで下さる、ア、方角を間違へて居りました、分かりました、難有うと申された。

○これが歎異鈔の第九章でありますよ、天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばれぬのは煩惱の所爲である、其煩惱のために喜ばれぬを、かねてしろしめして喜ばれぬものをと仰せられたのである、又いそぎ淨土へまゐりたき心のなくて、いさゝか所勞のこともあれば死なんするやらんと心細くおぼ

あらはれて下された、獨りだちの自督があらはれて下さつた。

○親父が佛壇から地獄へ落してはならぬと言はれたのが、即ち佛様の御思召である、本願の御呼聲のまゝである、此度かいたゞかれたのも全く如來様の深き御因縁である、私が數年前から御宅へ伺つたも今日の事のためであつた、嗚呼遇々行信を獲ば遠く宿縁を喜べ、中々一通りの因縁ではありませぬ、多生曠劫この世まで、あはれみかひれるこのみなりと申したところが、涙を泛べてよくくの御因縁でありましたく、と心の底から喜ばれた、嗚呼五年の長き間は今日あるがためなりしか、南無阿彌陀佛々々々々々々。

329

○本月二日第三求道會のとき、危篤の病人が車に乗りて参詣したいといふのである、夫なればといふので歸路に立寄りた、すると其嬉しげなる様子と、いかにも晴ればれたる信樂とは、周圍のものまで氣が晴れる位である、とても瀕死の病人とは思へぬ、信仰に入りたらば喜が溢れるのであらう、氣が樂々となるであらうと思つて居りましたが、果して其通りになりました、イツ何時如何にならうとも少しも心配はありませぬと申された、如何にも晴れ／＼した様子が文類正信偈の御文を想起さしめた、必ず無上淨信の曉に至りぬれば、三有生死の雲晴れ清淨無碍光耀明かに、一如法界眞身顯るとは此事じや。○數日經て夜深講話の歸路に立寄りて、先日之喜につきて右

ゆるのも　かねてしろしめしていそぎまゐりたき心のなさも
のを特に憐れみたまふのであると申した。

○長々方角を間違へて居りましたと繰返へ

○汽車の橋を通りて枕木の間より滔々と流るゝ水を臨むときは、誰でも目も廻らんばかりに身慄ひをして恐ろしきは當然である、其恐しいのが可受相と思召して、決して落さぬぞと襟元を捕へて下さるのが御慈悲の手である、恐しいは恐しいが、かくまでたしかなる御手なれば、行く先きも何が何やら分かんねども間も苦勞も氣にならぬ、念佛はまことに淨土にうまゝゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して他獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候と仰せられたは、此所である。

○かく喜ばれぬものを憐み、助からぬものを助けねばならぬの仰なれば、喜ばれぬにて往生は一定である、いそぎまゐりたきころのなきにつけて往生は決定でありますと、私も誓一君と共に深くいたゞかして貰ひました。

○誓一君は喜ばれぬが苦になりませぬ、何時に如何様のことありても心配はありません、南無阿彌陀佛と手離しの安心が

の御話をした、然るに此度は亦反對にイヤ／＼中々駄目であります、先日も一鍋の飯を食ひたる人が階下にありて話聲がするから、歸りには立寄りて呉れるかと思ふて居ました、しかるに其儘かへりて仕舞ひました、そこで一寸見舞ひくれても、よさそうなものじやと不足に思ひました、暫くして思ひ出して見れば、今日までに私がドレ程其人のために親切にしたか、其人が入學試験のために随分苦勞をして居たときも少しも同情をせなんだ、其人が入學したときも、少しも共に喜びて上げたことはないでないか、我身のことを善いものゝやうに思ふて居たが皆駄目じや、私は罪ばかりじや、罪の深いのか眼に見えるやうである、それを憐みて御助け下さる佛様の御慈悲ばかりが難有い／＼と、如何にも罪深いことを懺悔さるゝので、かくまで我機を知らして下さるかと驚くばかりじや、我等は瀕死の人ほど眼の當り惡さを感じることが出来ぬ、人は死が眼前にあらはるゝとき程、透徹したる有様はない、實に我等は罪の塊である、南無阿彌陀佛。

○其時私が若松求道會へ出立する前であつた、親父が申さるゝには先生は十五日朝でなければかへられぬのである、人間は何時か分からぬのであるから、萬が一にもモ一度承りたいといふやうなことがありては殘念じやが、モ先生に御目にかかれぬともさらに不審のなきまで安心が出来たかと尋ねられ

た、モハヤ少しも承ることは御座りませぬ、さらに心配はありませぬ、御慈悲ばかりが難有御座りますと申された、それでは先生、夜も遅くなりましたからと石松氏が申された、随分多くの人の臨終に御話をしたれども、かほど遠慮なく、病人に申されたこともないが、またかくまでも明瞭な返答をせられた人はない、私は合掌して御別れをして、御縁があればまた遇ひましようと思つて階を下るとき、頭をさし延べた姿が、今猶髣髴として眼底に残りてゐる、嗚呼實に是が私の誓一君に對する今生の最後の別れてあつた。南無阿彌陀佛。○其後毎日、石松氏やら奥様から歎異鈔を讀みて貰ふて難有い、と非常に喜ばれた、特に第九章をよむと心から嬉しさうであつたとの事である、他の所であると黙して聞ては居るが、多少不機嫌である、よむ所は第一章第二章第九章だけであつた、特に九章になると様子をかへて喜ばれたさうである。○不徳なる私を非常に慕はれて、待つて居られた、十五日朝になるとモ一度御遇ひ出来るが、とても夫までは駄目であらうと申された、親父がナニか尋ねたいこともあるかと申されたれば、尋ねることはなにもなければ、何遍にても御遇ひしたいばかりじやと言はれた、十四日朝高聲で三十遍程念佛せられたら、はや事切れて居られた、ア、今頃は極樂で待つて居て下さることであらう南無阿彌陀佛。

て居て下さることであらう南無阿彌陀佛。○遺言として親父に申さるゝには、自分が死んだら香奠は、そつくり、求道會館の寄附金に上げて下さい、そして其代りに皆様に雑誌を一冊づゝさし上げて下さい、そして皆様が同じ御慈悲をいたゞきて下さる様にして下さい、頼みますと申された、親父に申されたので足らぬと思はれたものか、店の方を二人まで呼びて夫を遺言された、かくまで會館のために心配して下さつたか、南無阿彌陀佛。○且つ誓一君の思召は此等の御厚意の親しき方々に、どうか同様に御慈悲をいたゞきて貰ひたい、社會の全體の人々にも是非之をいたゞきて貰ひたい、此文章は私が書いたのではない、誓一君が私をして書かしたのじや、何卒此文を讀まれん方々は、誓一君の深重なる御心をいたゞき下さい、書いて居る私は會館でも、雑誌でも、懈怠勝て申譯がありません、どうか奮發して誓一君の御遺志に酬むたいと思ひます、こゝに、しみて誓一君の親しき方々の厚き御志を悉く御受をいたしました、深く感謝いたします、どうぞ皆様も誓一君の思召の如く、此雑誌を熟讀して下さい、誓一君と同じ信仰に入りて、同じ妙果を得て下さい、皆様が此雑誌を手にして一遍の御稱名をせられたならば、御浄土から見て居らるゝ誓一君は、如何に満足せらるゝであらうか、南無阿彌陀佛。

時勢の要求する所、曩日求道會館設立趣意書の

發表となりしが、爾來數年を経て未だ會館設立の運びに至らず、これ畢竟近角師が専心一意布教傳道に急にして、實際經營の餘暇を有せられざるが爲なり、然るに明年は學舎創設已後滿十年たらし、信仰の氣運正に純熟して、求道者益々多きを加へ、從來の設備を以ては此の要求を満足せしむるあたはず、且つ現在の家屋漸次朽敗して會館建設の必要は更に焦眉の急を告ぐるに至れり。

我等同志或は師の勸化に隨喜し、或は師の熱心に同情する者茲に胥謀つて、専ら勸募の事に従ひ、以て師の素志を貫徹せしめんとす、伏して願はくば四方有縁の士助施捐財以て此の必需有用の事業をして速に完成せしめられんこと

を、謹て白す。

明治四十四年七月

世話人 (イロハ順)

西澤善七
小河滋次郎
大草慧實
荻野仲三郎
柏原文太郎
長尾收一
有田廣
澤柳政太郎

求道會館設計豫算概要

一金參萬五千圓

會館建築費備付品費
並ニ之ニ關スル諸雜費

求道會館設計概要

瓦葺煉瓦造坪數八十八坪

求道會館建築寄附金第八回報告

(十一月末まで)

一金五百三圓五拾錢也 日本橋清水石松殿

故清水誓一殿香奠全部也

右御本人の遺志によりて親父清水石松殿より御寄附被下正に拜受仕候茲に度んで香奠贈呈各位芳名を録して感謝の意を表し候也

鈴木忠治郎殿 渡邊平三郎殿
西野寛司殿 武田忠信殿
藤井茂作殿

木村政治郎殿 服部順一郎殿
小暮藤五郎殿 坂上平治郎殿
萩原長吉殿 畑中傳兵衛殿
伊藤延治郎殿 草薙市太郎殿

高居庫之助殿 川北徳三郎殿 尾澤豊作殿 杉江舊一郎殿 岡島政藏殿 松井房吉殿 山下哲三殿 内藤虎藏殿 佐々木米吉殿 井上宗治郎殿 館野吉之助殿 岩田仲藏殿 加藤文七殿 大塚常吉殿
吉川兵治郎殿 鳥井庄左衛門殿 糸見甚太郎殿 水谷藤太郎殿 鈴木善平殿 増田庄平殿 渡邊新治郎殿 加藤清殿 大崎市五郎殿 別府菊藏殿 秋森嘉平二殿 山田新治郎殿 中村政五郎殿 荻野金吉殿

藤田觀瀧殿 長谷川觀基殿 大平喜代松殿 服部清兵衛殿 若林喜太郎殿
稲田松治郎殿 川島政治郎殿 清馬榮治殿 丸山茂七殿

北原兼吉殿 熊澤今太郎殿 笹沼源之助殿 岡田延治郎殿 藤貫藤左衛門殿 佐々木政太郎殿 秋山隆殿 鈴木福太郎殿 山中清兵衛殿
大森巨殿 矢野元三郎殿 大森與四郎殿
鈴木保治殿

鈴木辰藏殿 神山茂平殿 別府春吉殿 船山米治郎殿 尾杉安太郎殿 愛知屋殿 中村治三郎殿 三橋庄三郎殿
鈴木辰藏殿 鶴巻常吉殿 豐田平吉殿 杉野純一殿 堀中五郎殿 伊庭伊三郎殿

萩原フジ殿 内山秀松殿 大野一造殿 山本富吉殿 佐藤長吉殿 森茂三郎殿 泉市藏殿 西村佐七郎殿 川添力藏殿 石田鷹藏殿 白川菊松殿 坂庄二殿 江澤福治郎殿 音澤信太郎殿 平野静殿 徳永久吉殿 植村長四郎殿 柴田文三郎殿 池内啓祐殿 栗津梅吉殿 岩崎熊吉殿
中島米吉殿 蛭薙久三郎殿 高橋虎五郎殿 前川龜吉殿 長谷川勝治郎殿 松本茂殿 松浦鐵治郎殿 土肥辰一郎殿 山口重知殿 岡田友治郎殿 大崎駒治殿 山口定吉殿 加藤ツヤ殿 田中長太郎殿 齋藤國三郎殿 橋本好正殿 大谷サク殿 谷井政吉殿 松井秀次郎殿 蒲生助治殿 岩田庄三郎殿

一金壹圓五拾錢也	日本橋	木	本	殿
一金壹圓五拾錢也	鹿兒島	太子	堂	忍殿
一金壹圓也	伏見	松	本	雪城殿
一金壹圓也	朽木	宮	田	太
一金壹圓也	下谷	秦	田	太
一金壹圓也	高知	大	熊	廓
一金五十錢也	高松	宮	武	勘
一金五十錢也	高松	新	田	庄
一金三十錢也	名古屋	津	村	季
				秋殿

總計金七百貳拾八圓九拾錢也

累計金壹萬壹千六百

九十七圓八十四錢也

右之通りニ候也

大正貳年十一月廿五日

世話人總代 長尾 收一
會計監督 西澤 善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存
候茲に謹みて奉感謝候也

近角 常觀

- 一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候
- 二、寄附金領収の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候
- 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

發賣所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京二六六九六番

求道發行所

●第一章 人生問題と信仰 ●第二章 悲觀思想と信仰 ●第三章 倫理力行と信仰 ●第四章 犯罪心理と信仰 ●第五章 社會問題と信仰 ●第六章 國家秩序と信仰 ●第七章 世界宇宙と信仰
本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一世として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は法律的敎訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

人生之信仰

版四第 定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『救異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇中に一掃せる感歎の實感とを最も眞摯精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯 救濟の一途ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

懺悔錄 附録『救異鈔』

版八第 定價二十錢
郵稅四錢
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心の經過を跡づけて、懺悔感喟の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

信仰之餘瀝

版貳拾第 定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

近角 常觀 著

前號要目

求道

◎四海兄弟と同一念佛

講話

◎『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第九席

信樂釋 (現生正定聚)

第十席

欲生釋 (如來回向)

告白

◎俗諦門の重荷をもちして 原久子

◎仕て見やうなき此の奴が寺島恕
◎信仰のたより

一

二

三

四

五

雜

錄

◎御舊蹟の處々

講義

◎歎異鈔 第十三章 唯圓坊の傳

徳田宗藏
河崎順子
安河内義夫
岡野秀一
近角常觀